

第二表

大將	一名	中大	將	三名	陸軍中將及七同 等ノ陸海軍人
大將	一名	中大	將	二名	陸海軍大將
判士長	一名	尉官	四名	陸海軍下士以下ノ軍人	
佐官	一名	尉官	四名	陸軍少尉及七同等ノ 陸海軍人並ニ准士官	
佐官	一名	大尉若クハ中尉	二名	陸軍中尉及七同 等ノ陸海軍人	
佐官	一名	尉官	二名	陸軍大尉及七同 等ノ陸海軍人	
大佐若クハ中佐	一名	尉官	二名	陸軍少佐及七同 等ノ陸海軍人	
大佐	一名	尉官	二名	陸軍中佐及七同 等ノ陸海軍人	
少將	一名	尉官	二名	陸軍大佐及七同 等ノ陸海軍人	
中將	一名	尉官	二名	陸軍少將及七同 等ノ陸海軍人	

第十二條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ストキハ陸軍大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ勅命ス
佐官ヲ以テ判士長判士ト爲シ尉官ヲ以テ判士ト爲ストキハ高等軍法會議ニ於テハ
陸軍大臣之ヲ命シ師管旅管ノ軍法會議ニ於テハ師團長其部下中ヨリ之ヲ命ス

師管旅管ニ於テ部下ニ非サル者ヲ以テ判士長判士ト爲スヲ要スルトキハ師團長ノ
上申ニ依リ陸軍大臣之ヲ命ス

第十三條 軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テハ長官其部下ノ將校中ヨリ判士長判士ヲ
命ス

第十四條 軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テハ長官專任判士ヲ命スルコトヲ得又部下
ノ下士ヲシテ錄事ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得
合圍ノ地ニ於テハ長官其地所在ノ高等官ヲ以テ判士若クハ理事ニ充テ判任官ヲ以
テ錄事ニ充ルコトヲ得

第十五條 判士長判士理事左ニ記載シタル者ナルトキハ其審判ニ從事スルコトヲ得
ス

- 一 被告人被害者及其配偶者ノ親屬
- 二 被告人被害者ノ後見人
- 三 告發人被害者及ヒ證據ヲ陳述シタル者

第十六條 原裁判ニ從事シタル判士長判士理事ハ再議及ヒ再審ノ裁判ニ列スルコト
ヲ得ス但關席裁判ニ對スル再審ニ於テハ此限ニ在ラス

第十七條 第十二條第三項ノ場合ニ於テ陸軍大臣ハ判士長判士ヲ命セスシテ被告人

ヲ他ノ師管旅管ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシムルコトヲ得

第三章 軍法會議ノ權限

第十八條 師管旅管ノ軍法會議ハ其師管旅管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲シ所屬軍人ノ犯罪ヲ審判ス

第十九條 軍人管轄地外ニ於テ罪ヲ犯シタルトキハ其地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得

第二十條 高等軍法會議ハ將官若クハ其同等軍人ノ犯罪ヲ審判シ及ヒ再審ノ審判ヲ爲ス但他ノ軍法會議ニ於テ爲シタル闕席裁判ニ對スル再審ハ此限ニ在ラス

第二十一條 軍團師團混成旅團ノ軍法會議ハ其團所屬佐官以下ノ軍人ノ犯罪ヲ審判ス

第二十二條 合圍ノ地ノ軍法會議ハ總テ其地所在佐官以下ノ軍人ノ犯罪ヲ審判ス

第二十三條 臨戰若クハ合圍ノ地ノ軍法會議ニ於テハ從軍常人ノ犯罪ヲ審判シ又何人ト雖モ陸軍刑法ヲ以テ論スヘキ罪ヲ犯シタルトキハ其審判ヲ爲ス可シ

合圍ノ地ノ特別裁判權ハ戒嚴令定ムル所ニ依ル

第二十四條 軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テ專任判士ヲ以テ構成シタル軍法會議ハ高等軍法會議ノ管轄ニ屬スル事件ノ外被告人ノ身分ニ拘ハラズ其犯罪ヲ審判スル

コトヲ得

第二十五條 俘虜降人ノ犯罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十六條 軍人任官就役前ノ犯罪ト雖モ在官在役中ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス
在官在役中ノ犯罪ト雖モ免官免役ノ後告訴發アリタルトキハ普通裁判所ノ裁判ニ附ス

第二十七條 軍人二人以上共ニ罪ヲ犯シ若クハ附帶犯ニシテ各其管轄ヲ異ニスルトキハ先ニ審判ニ著手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判シ高等軍法會議ノ管轄ニ屬スル者ト共犯若クハ附帶犯ニ係ルトキハ高等軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍軍人ト共犯若クハ附帶犯ニ係ルトキ亦同シ

第二十八條 重罪輕罪ト俱ニ發シ若クハ重罪輕罪ニ附帶シ若クハ重罪輕罪トシテ審判ニ着手シタル違警罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十九條 軍中若クハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルトキハ其軍法會議ニ於テ管轄シタル被告事件ハ通常ノ權限ニ照シ管轄軍法會議ヲ以テ其管轄ト爲ス

第四章 陸軍檢察

第三十條 陸軍檢察官ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ證憑ヲ收集ス

第三十一條 陸軍檢察官ハ左ニ記載シタル諸官ヲ以テ之ニ充ツ

- 一 憲兵ノ將校下士
 - 二 師團副官
 - 三 旅團副官
 - 四 警備隊司令官
- 第三十二條 各所管ノ長官團隊ノ長タル將校大隊區司令官監獄長衛兵司令ハ各其管スル所ノ事ニ關シ犯罪アルコトヲ知リタルトキハ檢察ノ處分ヲ爲シ若クハ陸軍檢察官ニ其處分ヲ委ス可シ
- 理事職務ヲ行フノ際現行犯アルコトヲ知リタルトキハ訊問及ヒ檢證ノ處分ヲ爲ス可シ
- 第三十三條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長大隊區司令官監獄長衛兵司令又ハ豫審判事檢察司法警察官ニ之ヲ告訴スルコトヲ得
- 第三十四條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタルトキハ前條ニ記載シタル諸官ニ之ヲ告發スルコトヲ得
- 第三十五條 陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタルトキハ第三十三條ニ記載シタル諸官ニ之ヲ告發ス可シ

- 第三十六條 陸軍檢察官憲兵卒司法警察官巡查ハ軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ直ニ之ヲ逮捕ス可シ
- 第三十七條 何人ヲ論セス軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルトキハ直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得
- 其逮捕シタル者ハ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長大隊區司令官監獄長衛兵司令又ハ司法警察官若クハ憲兵卒巡查ニ之ヲ交付ス可シ
- 第三十八條 憲兵卒巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタルトキハ前條ニ記載シタル諸官ニ之ヲ引致ス可シ
- 第三十九條 陸軍檢察官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタルトキハ訊問及ヒ檢證ノ處分ヲ爲シ調書ヲ作ル可シ
- 第三十二條ニ記載シタル諸官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタルトキハ前項ノ處分ヲ爲シ又ハ其處分ヲ陸軍檢察官ニ委スルコトヲ得
- 第四十條 陸軍檢察官及ヒ第三十二條ニ記載シタル諸官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其檢證ノ處分ヲ爲ストキハ公力ヲ用フルコトヲ得
- 第四十一條 陸軍檢察官及ヒ第三十二條ニ記載シタル諸官軍人ト共犯ノ常人アルコトヲ知リタルトキハ前數條ニ照シ其處分ヲ爲ス可シ

第四十二條 司法警察官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタルトキハ假リニ訊問及ヒ檢證ノ處分ヲ爲シ調書ヲ作り陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長大隊區司令官監獄長衛兵司令ニ之ヲ送致ス可シ

第四十三條 豫審判事檢事司法警察官軍人ニ係ル重罪輕罪ノ告訴告發ヲ受ケタルトキハ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長大隊區司令官監獄長衛兵司令ニ之ヲ交付ス可シ

第四十四條 告訴人告發人ハ其願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更セシコトヲ請求スルコトヲ得

第四十五條 陸軍檢察官及ヒ第三十二條ニ記載シタル諸官檢察ノ處分ヲ爲シタルト

キハ被告事件ニ證據物件ヲ添ヘ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 重罪輕罪ト認ムルトキハ之ヲ長官ニ具申シ違警罪ト認ムルトキハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ交付ス可シ

二 裁判管轄ニ非サル者軍人ナルトキハ其事件ヲ管轄ス可キ軍法會議所在ノ地ノ陸軍檢察官ニ送致シ海軍軍人ナルトキハ海軍軍法會議ノ主理ニ送致シ常人ナルトキハ檢察處分ヲ爲シタル地ノ檢事ニ送致ス可シ但軍人ト共犯ノ常人ナルトキハ長官ニ具申ス可シ

三 高等軍法會議ノ管轄ニ屬スル者ナルトキハ陸軍大臣ニ具申ス可シ

第五章 審問

第四十六條 陸軍大臣又ハ長官被告事件ノ具申ヲ受ケタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 其犯罪輕罪以上ノ刑ニ該ル可キモノト認ムルトキハ審問若クハ審判ノ命令ヲ下シ禁錮以下ノ刑ニ該ル可キモノニシテ審問ヲ要セスト認ムルモノ及ヒ違警罪ノ正式裁判ニ附ス可キモノハ直ニ判決ノ命令ヲ下ス可シ

二 審問若クハ審判若クハ判決ノ命令ヲ下シタルトキハ其事件ヲ理事ニ下付ス可シ

第四十七條 理事審問ヲ爲ストキハ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ

被告人出廷シタルトキハ即日之ヲ訊問ス可シ

罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ハ代人ヲ出廷セシムルコトヲ得

第四十八條 理事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第四十九條 理事ハ重罪ノ刑ニ該ル可キモノト認ムル被告人ナルトキ又ハ輕罪以下ノ刑ニ該ル可キ者ト認ムル被告人ニシテ罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走ノ恐れアルトキ

又ハ未遂罪ヲ犯シ其目的ヲ遂ケ若クハ脅迫罪ヲ犯シ其手段ヲ實行スルノ恐レアルトキハ直ニ勾引狀ヲ發ス可シ

第五十條 勾引狀ハ管轄地外ト雖モ之ヲ執行スルコトヲ得

第五十一條 理事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ルトキハ其地ノ陸軍檢察官若クハ理事豫審判事司法警察官ニ訊問ヲ囑託スルコトヲ得又陸軍檢察官理事司法警察官ニ召喚狀ノ送達勾引狀ノ執行ヲ囑託スルコトヲ得

第五十二條 勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ四十八時ヲ經過シ仍ホ留置ヲ要スルトキハ收禁狀ヲ發ス可シ

第五十三條 理事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタルトキハ其所在ニ就キ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ルトキハ其地ノ理事陸軍檢察官若クハ豫審判事司法警察官ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第五十四條 理事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ陸軍檢察官及ヒ各控訴院ノ檢察長ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ムルコトヲ得

第五十五條 理事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト認メタルトキハ收禁狀ヲ發スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非ス又ハ收禁ヲ要セサルモノト認メタルトキハ收禁ヲ取消ス可シ

第五十六條 勾引狀收禁狀ハ憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム可シ但憲兵ヲ置カサル地ニ於テハ衛兵ヲシテ之ヲ執行セシム可シ

勾引狀ハ受ク可キ被告人營内若クハ隊伍ニ在ルトキハ隊長ニ依リ其執行ヲ求ム可シ
被告人海軍艦船營内若クハ隊伍ニ在ルトキハ艦船營長隊伍ノ長ニ依リ其執行ヲ求ム可シ

憲兵卒衛兵勾引狀ヲ執行スルニ當リ被告人其家宅若クハ他人ノ家ニ逃匿シタリト認メタルトキハ其地ノ戶長若クハ隣佑ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索シ其調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ立會ヲ求ムルニ暇アラス若クハ之ヲ得ル能ハサルトキハ其立會ナクシテ搜索ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 理事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ其地ノ陸軍檢察官若クハ理事豫審判事司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第五十八條 理事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シ

テ被告事件ニ關係アル往復文章電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所
遠隔ノ地ニ在ルトキハ前條第二項ノ例ニ依リ本條ノ處分ヲ囑託スルコトヲ得

第五十九條 理事ハ證人及ヒ通事ヲ呼出スルコトヲ得

證人皇族若クハ勅任官ナルトキハ理事其所在ニ就キ陳述ヲ聽ク可シ
證人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタルトキハ理
事其所在ニ就キ之ヲ訊問スルコトヲ得

證人遠隔ノ地ニ在ルトキハ第五十七條第二項ノ例ニ依リ本條ノ處分ヲ囑託スルコ
トヲ得

第六十條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲スコトヲ得ス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ
聽クコトヲ得

- 一 被害者
- 二 被害者及ヒ被告人ノ親屬
- 三 被害者及ヒ被告人ノ後見人又ハ其後見ヲ受クル者
- 四 被害者及ヒ被告人ノ雇人
- 五 現ニ陳述ヲ爲スコキ事件ニシテ曾テ訴ヲ受ケ證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ
宣告ヲ受ケタル者

六 重罪事件ノ爲メ軍法會議ノ判決ニ附セラレタル者若クハ重罪裁判所ニ移スノ
言渡ヲ受ケタル者及ヒ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ノ爲メ軍法會議又ハ普
通裁判所ノ判決ニ附セラレタル者

七 公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ公權ヲ停止セラレタル者

八 十六歳未滿ノ者

九 智覺精神ノ不充分ナル者

十 瘖啞者

第六十一條 理事被告人證人事實參考人ヲ訊問シ若クハ臨檢家宅搜索物件押收ノ處
分ヲ爲ストキハ錄事之ニ立會ヒ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人證人事實
參考人ニ讀示ス可シ

理事ハ其讀示シタル所其陳述ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ陳述者ヲシテ之ニ署名捺印セ
シム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ錄事ヲシテ其旨ヲ記セシム可シ
急遽ノ際若クハ事故アリテ錄事立會ヲ爲スコト能ハサルトキハ其立會ナクシテ本
條ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第六十二條 理事犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スルト
キハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ

但第六十條ニ記載シタル者ハ鑑定人ト爲スコトヲ得ス若シ急遽ノ際正當ノ鑑定人ヲ得ルコト能ハサルトキハ參考ノ爲メ之ニ鑑定ヲ命スルコトヲ得

鑑定ヲ爲シタル者ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ若シ結果ヲ得ルコト能ハサルトキハ其推測スル所ヲ記シ之ニ署名捺印ス可シ

第六十三條 理事ハ證人通事鑑定人ヲシテ正實ニ陳述通譯鑑定ヲ爲スコトヲ宣誓セシム可シ

理事ハ證人通事鑑定人ニ宣誓書ヲ讀示シ之ニ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ錄事ヲシテ其旨ヲ附記セシム可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添ヘ置ク可シ

第六十四條 理事ハ證人鑑定人通事事實參考人及ヒ參考ノ爲メ鑑定ヲ命シタル者疾病其他正當ノ事故ヲ證明セズシテ呼出ニ應セサルトキハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ若シ再度ノ呼出ニ應セサルトキハ更ニ二倍ノ罰金ヲ科ス可シ若シ五日内ニ正當ノ事故アリテ出廷スルコト能ハサリシコトヲ證明シタルトキハ罰金ノ宣告ヲ取消ス可シ

前項ノ場合ニ於テ證人事實參考人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第六十五條 理事ハ證人鑑定人宣誓ヲ肯セズ若シハ宣誓シテ陳述鑑定ヲ肯セサルト

キハ證人ハ普通刑法第百八十條ニ依リ鑑定人ハ同法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

證人トシテ呼出シタル醫師藥商穩婆代言人辯護人公證人神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ因リ委託ヲ受ケタル事ニ關シ陳述ヲ肯セサルトキハ前項ノ例ニ在ラス

第六十六條 理事ハ通事宣誓ヲ肯セズ若シハ宣誓シテ通譯ヲ肯セサルトキ又ハ事實參考ノ爲メ陳述鑑定ヲ命セラレタル者之ヲ肯セサルトキハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ

第六十七條 理事ハ證人事實參考人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ犯所若シハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

證人事實參考人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第六十四條ニ照シ罰金ヲ科ス可シ

第六十八條 證人鑑定人通事事實參考人及ヒ參考ノ爲メ鑑定ヲ命セラレタル者ニ科シタル罰金ヲ納完セシメ若シハ罰金ヲ禁錮ニ換フルノ處分ハ普通刑法第二十七條ニ依リ理事之ヲ爲スコトヲ得

第六十九條 理事ハ被告事件ニ關スル調書説明ノ爲メ其調書ヲ作りタル陸軍檢察官司法警察官其他ノ官吏ヲ呼出スコトヲ得

第七十條 理事審問ニ於テ共犯附帶犯若クハ餘罪ヲ覺舉シタルトキハ直ニ之ヲ審問ス可シ但其共犯者附帶犯者高等軍法會議ノ管轄ニ屬スルトキハ之ヲ長官ニ具申ス可シ

第七十一條 軍人ト共犯セシ常人ハ審問ヲ終リタル後證據物件ヲ添ヘ其共犯事件ヲ管轄スル軍法會議所在ノ地ノ檢事ニ送致ス可シ

第七十二條 理事ハ審問中被告人ヲ其親屬故舊ニ責付スルコトヲ得但營内居住ノ者ハ責付スルノ限ニ在ラス

第七十三條 理事審判若クハ審問ノ命令ヲ受ケタル事件ノ審問ヲ終リ若クハ判決ノ命令ヲ受ケタルトキハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 審判若クハ判決ノ命令ヲ受ケタル事件ニ於テハ意見書ヲ作り訴訟書類ト共ニ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ定メ判士長判士ニ通報ス可シ

二 裁判管轄ニ非ス若クハ免訴ト爲ス可キ事件ニ於テハ訴訟書類ニ意見書ヲ添ヘ其命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ具申ス可シ審問ノ命令ヲ受ケタル事件ニ於テモ亦同シ

第七十四條 陸軍大臣又ハ長官審問ノ命令ヲ下シタル事件ノ具申ヲ受ケ其事件有罪ナリト認メタルトキハ更ニ判決ノ命令ヲ下ス可シ

第六章 判決

第七十五條 軍法會議ハ判士長判士理事錄事列席シテ之ヲ開ク可シ

第七十六條 判士長ハ被告人ヲ訊問シ若クハ判士又ハ理事ヲシテ其訊問ヲ爲サシム可シ

理事其訊問ヲ要スルトキハ判士長ニ請フテ自ラ之ヲ訊問シ若クハ其訊問ヲ求ムルコトヲ得

第七十七條 判士長ハ開廷ヨリ判決終結ニ至ルマテノ間必要ト認ムルトキハ令狀ヲ發スルコトヲ得

判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲スコトヲ得

法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アルトキハ判士長檢證ノ處分ヲ爲シ若クハ判士又ハ理事ヲシテ其處分ヲ爲サシメ調書及ヒ證據文書ヲ添ヘ其命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ具申ス可シ但其犯人被告人ナルトキハ本案事件ト共ニ直ニ判決ヲ爲ス可シ

第七十八條 判士長ハ法廷其他ノ場合ニ於テ證人鑑定人通事ヲ要シ若クハ調書説明ノ爲メ官吏ノ呼出ヲ要スルトキハ第五章ノ例ニ依ル

第七十九條 證人鑑定人通事事實參考人及ヒ參考ノ爲メ鑑定ヲ命セラレタル者疾病其他正當ノ事故ナクシテ呼出ニ應セサルトキハ理事ノ意見ヲ聽キ軍法會議ニ於テ

直ニ左ノ罰金科料ヲ科ス可シ

一 違警罪事件ニ於テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料
二 輕罪以上ノ事件ニ於テハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金

第八十條 判士長ハ證人事實參考人ヲ訊問シ若クハ判士又ハ理事ヲシテ其訊問ヲ爲サシム可シ

理事其訊問ヲ要スルトキハ判士長ニ請フテ自ラ之ヲ訊問シ若クハ其訊問ヲ求ムルコトヲ得

第八十一條 判決ノ爲メ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアルトキハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士又ハ理事ヲシテ之ヲ爲サシム可シ

共犯附帯犯若クハ餘罪ヲ覺擧シタルトキハ直ニ其判決ヲ爲シ若クハ理事ニ移シテ其審問ヲ爲サシム可シ但其共犯者附帯犯者高等軍法會議ノ管轄ニ屬スルトキハ判士長ヨリ其命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ具申ス可シ

第八十二條 被告人ノ訊問終リタルトキハ判士長更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キコトナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタル旨ヲ告ケ被告人ヲ退廷セシメ其判決ヲ爲ス可シ

第八十三條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ開廷ノ日時ニ出廷セス若クハ其逃走ニ由リ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サルトキ及ヒ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被

告人召喚狀ヲ受ケ開廷ノ日時ニ出廷セサルトキハ開席裁判ヲ爲スコトヲ得

第八十四條 數人共犯ノ判決ヲ爲ストキハ被告人中開席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對シ其判決ヲ爲スコトヲ得

第八十五條 理事ハ會議席ニ列シ意見書ノ趣旨ヲ説明ス可シ會議ノ判決其意見ト合ハサルトキハ其旨ヲ記シタル書面ヲ判決書ニ添フルコトヲ得

其判決法律ニ違ヒ再議スヘキ理由アリト認ムルトキハ其判決ノ命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ具申ス可シ

第八十六條 判決書ハ理事左ノ條件ニ照ラシテ之ヲ作り判士長判士錄事ト共ニ署名捺印シ訴訟文書ヲ添ヘ其命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ具申ス可シ

一 判決ノ理由

二 有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三 無罪ノ判決書ニハ被告人ノ死去セシコト若クハ人違ナリシコト若クハ被告事件罪トナラサルコト若クハ犯罪ノ證憑備ラサルコト

四 免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト若クハ大赦アリタルコト若クハ確定裁判ヲ經タルコト若クハ法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト

五 管轄違ノ判決書ニハ其旨
 六 私訴ノ裁判アリタルトキハ其旨
 七 被告人ノ官位勳爵隊號職名氏族籍年齡住所判決ノ年月日
 第八十七條 左ニ記載シタルモノハ訴訟書類ヲ添ヘ長官ヨリ陸軍大臣ニ具申シ其他ハ長官ニ於テ裁判宣告ノ命令ヲ下ス可シ
 一 死刑ニ該リタルトキ
 二 佐官及ヒ其同等軍人重罪輕罪ノ刑ニ該リタルトキ
 三 尉官及ヒ其同等軍人重罪ノ刑ニ該リタルトキ
 第八十八條 陸軍大臣前條ノ具申ヲ受ケタルトキ又ハ高等軍法會議ノ判決將官及ヒ其同等軍人ノ重罪輕罪ニ該リ若クハ前條ニ記載シタルモノニ該リタルモノハ意見書ヲ附シ上奏ス可シ
 其裁可アリタルトキ高等軍法會議ノ判決ニ係ルモノハ裁判宣告ノ命令ヲ下シ他ノ軍法會議ノ判決ニ係ルモノハ長官ニ下付シ長官ヲシテ裁判宣告ノ命令ヲ下サシム可シ
 第八十九條 軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テハ長官第八十七條ノ例ニ依ラス直ニ裁判宣告ノ命令ヲ下スコトヲ得

第九十條 長官軍法會議ノ判決法律ニ違ヒタリト認ムルトキハ之ヲ再議セシメ直ニ裁判宣告ノ命令ヲ下ス權ナキモノハ意見書ヲ附シ陸軍大臣ニ具申ス可シ
 第九十一條 陸軍大臣高等軍法會議若クハ長官ヨリ具申シタル判決法律ニ違ヒタリト認ムルトキハ之ヲ再議セシム可シ
 第九十二條 裁判宣告ノ命令アリタルトキハ判士長判士理事錄事列席シ被告人ヲ出廷セシメ判士長其宣告ヲ爲ス可シ
 關席裁判ノ宣告ハ被告人關席ノマ、之ヲ爲ス可シ禁錮以上ノ刑ニ該リタル被告人對審終結ノ後逃走シテ出廷セス若クハ罰金以下ノ刑ニ該リタル被告人呼出ニ應セサルトキ亦同シ
 第九十三條 禁錮以上ノ刑ニ該リタル被告人其宣告ヲ受ケテ逃走シ若クハ前條第二項ニ依リ宣告アリタル者禁錮以上ノ刑ニ該ルトキハ理事逮捕狀ヲ發ス可シ
 逮捕狀執行ノ方法ハ勾引狀執行ノ例ニ依ル
 若シ其所在分明ナラサルトキハ陸軍檢察官及ヒ控訴院ノ檢事長ニ人相書ヲ送り逮捕ヲ求ムルコトヲ得
 第九十四條 被告人關席ノマ、宣告ヲ爲シタルトキハ其宣告書ヲ軍法會議ノ門前ニ揭示シ其一通ヲ被告人ノ住所ニ送達ス可シ

第七章 再審

第九十五條 陸軍大臣軍法會議ニ於テ法律ノ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ宣告シ若クハ法律ニ定ムル所ノ刑ヨリ重キ刑ヲ宣告シ若クハ無罪ノ宣告ヲ爲ス可キニ免訴ノ宣告ヲ爲シタルコトアルヲ知リタルトキハ再審ヲ爲サシム可シ

第九十六條 軍法會議ノ宣告左ニ記載シタル條件ニ觸ル、モノアルトキハ理事及ヒ被告人ヨリ再審ノ申訴ヲ爲スコトヲ得被告人死去シタルトキハ其親屬之ヲ爲スコトヲ得

- 一 人ヲ殺シタル罪ニ付刑ノ宣告アリタル後其殺サレタリト認メラレタル者犯罪後現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル確證アリタルトキ
 - 二 同一ノ事件ニ付共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ宣告ヲ受ケタル者アリタルトキ
 - 三 公正ノ證書ヲ以テ當時犯罪ノ場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ
 - 四 既ニ判決ヲ經タル事件ニ對シ再ヒ判決アリタルトキ
 - 五 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ宣告ヲ受ケタル者アリタルトキ
 - 六 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ
- 第九十七條 陸軍大臣前條ニ記載シタル事實アルコトヲ知リタルトキハ再審ヲ爲サシム可シ

長官其事實ヲ發見シタルトキハ訴訟書類ニ意見書ヲ附シ陸軍大臣ニ具申ス可シ

第九十八條 闕席裁判ニテ禁錮以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ再審ノ申訴ヲ爲スコトヲ得但裁判宣告アリタルコトヲ知リ若クハ捕ニ就キ若クハ自首シタルトキハ重罪ノ刑ニ於テハ十日禁錮ノ刑ニ於テハ三日内ニ非レハ申訴ヲ爲スコトヲ得ス

罰金以下ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ハ其住所ニ宣告書ノ送達アリタル日ヨリ三日内ニ再審ノ申訴ヲ爲スコトヲ得

第九十九條 再審ノ申訴ハ刑ノ宣告ヲ爲シタル軍法會議ヲ管轄スル長官ニ之ヲ爲ス可シ

高等軍法會議ニ於テ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ナルトキハ陸軍大臣ニ其申訴ヲ爲スコシ
理事其中申訴ヲ爲ストキハ其理由書ニ原裁判宣告書ノ謄本及ヒ證書書類ヲ添フ可シ
被告人若クハ其親屬其中申訴ヲ爲ストキハ其理由書ヲ理事ニ出シ理事意見書ヲ添フ可シ

長官再審ノ申訴ヲ受ケタルトキハ訴訟書類ニ意見書ヲ添へ之ヲ陸軍大臣ニ具申ス

可シ
闕席裁判ニ對スル申訴ナルトキハ直ニ再審ヲ爲サシム可シ
陸軍大臣再審ノ申訴ヲ受ケ若クハ長官ヨリ再審ノ具申ヲ受ケタルトキハ其再審ヲ爲サシム可シ

第一百條 陸軍大臣再審ノ命令ヲ下シタルトキ刑ノ執行中ニ係ルモノハ其執行ヲ停止ス可シ

第一百一條 再審ヲ爲シタル事件前ニ上奏ヲ經タルモノナルトキハ其判決ヲ上奏シテ裁可ヲ請フ可シ

第八章 復權

第一百二條 復權ノ願ハ普通刑法第六十三條ニ定メタル期限ヲ經過シタル後刑ノ宣告ヲ受ケタル者ヨリ陸軍大臣ニ之ヲ爲スコトヲ得

其復權願書ハ二通ヲ作り本人署名捺印シ左ニ記載シタル書類ヲ添ヘ郡區長ニ出シ郡區長願人ノ品行其他必要ノ調査ヲ爲シ地方長官ニ出シ其長官ハ之ニ意見書ヲ添ヘ願人住居ノ地ヲ管轄スル長官ニ出ス可シ

- 一 裁判宣告書ノ謄本
- 二 主刑ノ滿期若クハ特赦若クハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假リニ監視ヲ免セラレタルコトアルトキハ其證書

四 賠償ノ義務ヲ免カレタル證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載シタル書類

第一百三條 長官前條ノ書類ヲ受領シタルトキハ之ヲ理事ニ付シ理事更ニ必要ノ調査ヲ爲シ意見書ヲ作り一切ノ書類ヲ添ヘ長官ニ出シ長官ハ意見書ヲ付シ陸軍大臣ニ具申ス可シ

第一百四條 陸軍大臣復權ノ願ニ關スル書類ヲ受領シタルトキハ意見書ヲ附シテ上奏ス可シ

第一百五條 復權ノ願裁可アリタルトキハ陸軍大臣裁可狀ヲ長官ニ下付シ長官ハ理事ヲシテ地方長官ヲ經テ本人ニ傳達セシム可シ

理事ハ裁可狀ノ謄本ヲ刑ノ宣告ヲ爲シタル軍法會議ニ送致シ軍法會議ニ於テハ之ヲ裁判宣告書ニ記入ス可シ

第一百六條 復權ノ願棄却セラレタルトキハ陸軍大臣願書ニ其旨ヲ記シタル書面ヲ附シ長官ニ下付シ長官ハ理事ヲシテ前條第一項ノ處分ヲ爲サシム可シ

復權ノ願棄却セラレタルトキハ普通刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非レハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

第九章 特赦

第七條 特赦ノ申請ハ刑ノ宣告ヲ爲シタル軍法會議ヲ管轄スル長官又ハ理事若クハ司獄官ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ陸軍大臣ニ之ヲ爲スコトヲ得

理事其ノ申請ヲ爲ストキハ裁判宣告ノ命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ其書面ヲ出ス可シ長官其書面ヲ受領シタルトキハ之ニ意見書ヲ附シ陸軍大臣ニ具申ス可シ

司獄官其申請ヲ爲ストキハ裁判宣告ノ命令ヲ下シタル陸軍大臣又ハ長官ニ其書面ヲ出ス可シ長官其書面ヲ受領シタルトキハ理事ノ意見書ヲ徵シ自己ノ意見書ヲ附シ陸軍大臣ニ具申ス可シ

第八條 陸軍大臣前條ノ書類ヲ受領シタルトキハ意見書ヲ附シ上奏ス可シ

第九條 陸軍大臣ハ刑ノ宣告アリタル後何時ニテモ特赦ノ上奏ヲ爲スコトヲ得

第十條 特赦ノ申請アルモ死刑ヲ除ク外ハ刑ノ執行ヲ停止セス

第十一條 特赦ノ上奏裁可アリタルトキハ陸軍大臣特赦狀ヲ長官ニ下附シ長官ハ理事ヲシテ之ヲ本人ニ傳達セシム可シ高等軍法會議ノ理事ノ申請ニ係ルモノハ其理事ハ特赦ノ裁可アリタル旨ヲ裁判宣告書ニ記入ス可シ

●陸軍治罪法執行規則ヲ定ム

明治二十一年十一月 陸達第二百四號

陸軍治罪法執行規則別冊ノ通之ヲ定メ來ル明治二十二年一月一日ヨリ施行シ罪犯取扱手續並書式ハ本年限り之ヲ廢止ス

(別冊)

陸軍治罪法執行規則

第一條 陸軍檢察官各所管ノ長官團隊ノ長タル將校大隊區司令官監獄長衛兵司令理事檢察ノ處分ヲ終リ陸軍大臣若クハ長官ニ具申スルトキハ左ノ書類物品ヲ添フ可シ

- 一 被告人調書
- 二 被害届
- 三 私訴ノ請求書
- 四 證據人調書
- 五 證據物品其他參考書類
- 六 鑑定書
- 七 檢證調書

八 所在分明ナラサル被告人ノ人相書
 九 書類及ヒ物品目録
 被告人所屬ノ長官隊長檢察ノ處分ヲ爲シ具申テナストキハ被告人ノ前罰科^{宣告書}ノ其全
 文 素行調書ヲ添フ可シ

第二條 長官審問若クハ審判判決ノ命令ヲ下ストキハ命令書ヲ訴訟書類ト共ニ理事
 ニ下付ス可シ

裁判管轄ニアラサルモノ及ヒ下ス可カラサルモノハ其書類ヲ返還ス可シ

第三條 理事陸軍大臣若クハ長官ヨリ被告事件ノ下付アリタルトキハ錄事ヲシテ其
 事件及ヒ所管隊號氏名等ヲ帖簿ニ登記セシメ審問判決ヲ爲スノ手續ヲ爲ス可シ

第四條 召喚狀ヲ發スルトキ被告人軍人ナルトキハ其所屬ノ官廨本隊若クハ被告事
 件ヲ具申シタル檢察官ニ移シテ送付ノ處分ヲ求ム可シ若シ護送ヲ要スルトキハ之
 ヲ求ムルコトヲ得但營外居住ノ者ニ係ルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムル
 コトヲ得

被告人所在ノ地ニ所屬官廨若クハ本隊アラサルトキハ本人ニ交付シ出廷セシム可
 シ

第五條 令狀執行ノ命令ヲ受ケタル者之ヲ執行シ若クハ執行スル能ハサルトキハ其

旨ヲ理事ニ報告ス可シ

第六條 召喚狀勾引狀ヲ以テ出廷セシメタル被告人ニ收禁狀ヲ發シ若クハ留置ヲ命
 シタルトキハ看守卒若クハ憲兵卒ヲ以テ監獄ニ護送セシム可シ憲兵卒ノ設ケナキ
 地ニ在テハ衛兵ヲシテ護送セシムルコトヲ得

勾引狀ヲ以テ監獄ニ護送セシムルトキハ亦前項ノ例ニ依ル可シ

第七條 勾引狀ヲ以テ留置スル期限ハ休暇ノ日ヲ算入セサルモノトス

第八條 罰金以下ノ刑ニ該ルモノト認ムルトキト雖モ其被告人遠隔ノ地ニ在ル軍人
 ニシテ營内居住ノ者ナルトキハ之ヲ監獄ニ留置スルコトヲ得

第九條 被告人ヲ收禁留置シ若クハ收禁留置ヲ取消シタルトキハ理事被告人所屬ノ
 官廨若クハ本隊及ヒ監獄ニ通報ス可シ他管ノ軍人ヲ收禁留置シタルトキハ本管軍
 法會議ニモ之ヲ通報ス可シ其奏任以上及ヒ帶勳者ニ係ルトキハ之ヲ長官ニ具申シ
 高等軍法會議ニ在テハ之ヲ陸軍大臣ニ具申ス可シ

長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ上申ス可シ但帶勳者ニ係ルトキハ勳章年金褫奪及ヒ停止取
 扱手續第八條ニ依リ其處分ヲ爲ス可シ

第十條 外國公使館内ニ於テ檢證ヲ爲スコトヲ要シ若クハ令狀ヲ受クヘキ者外國公
 使館ニ雇ハレ若クハ外國公使館内ニ住居スル者ニ係ルトキハ理事其事實ヲ記シ其

公使館ノ承諾ヲ得ンコトヲ長官ニ具申シ高等軍法會議ニ在テハ之ヲ陸軍大臣ニ具申ス可シ

長官ハ之ヲ陸軍大臣ニ具申ス可シ

陸軍大臣ヨリ外國公使館ニ於テ承諾アリタルノ下達アリタルトキハ理事其旨ヲ公使館官吏ニ告ケ檢證處分ヲ爲シ若クハ令狀ニ承諾ヲ經タル旨ヲ記載シタル書面ヲ添ヘ令狀執行者ヲシテ之ヲ公使館官吏ニ示シテ執行セシム可シ

第十一條 被告人ヲ責付シタルトキハ理事被告人ヲシテ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷スヘキノ證書ヲ出サシメ且ツ責付セラレタル者ヲシテ注意視察スヘキ旨ノ證書ヲ出サシム可シ

被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサルトキハ責付ヲ取消ス可シ

第十二條 證人鑑定人通事事實參考人參考ノ爲メ鑑定ヲ命スヘキ者軍人ナルトキハ其所屬ノ官廳若クハ本隊ニ呼出狀ヲ移シテ其出廷ヲ求ム可シ但營外居住ノ者ナルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムルコトヲ得

其地ニ所屬官廳若クハ本隊アラサルトキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシム可シ

第十三條 判士長理事證人鑑定人等ニ罰金ヲ科スルトキハ錄事ト共ニ法廷ニ臨ミ之ヲ宣告ス可シ判士長宣告ヲ爲ストキハ理事之ヲ立會フ可シ

呼出ニ應セサルニ因リ罰金ヲ科セラレタル者營内居住ノ者ナルトキハ理事宣告書ヲ本人所屬ノ官廳若クハ本隊ニ移シテ其送達ヲ求メ且罰金ヲ期限内納完セシムヘキ旨ヲ照會シ營外居住ノ者ナルトキハ直チニ宣告書ヲ其住所ニ送達ス可シ

判士長ノ科シタル罰金ノ宣告書ハ判士長錄事署名捺印シ理事ノ科シタル罰金ノ宣告書ハ理事署名捺印ス可シ

罰金ノ宣告ヲ爲シ若クハ其宣告ヲ取消シタルトキハ第二十九條ノ例ニ從ヒ理事之ヲ本人所屬ノ官廳若クハ本隊及ヒ區戸長ニ通報ス可シ

限内罰金ヲ納完ヒス若クハ罰金ニ換ヘタル禁錮限内罰金ヲ納完シタルトキハ第三十一條第三十二條ノ例ニ從フ但理事ノ科シタル罰金ヲ禁錮ニ換フルトキハ理事直チニ之ヲ命ス

第十四條 理事被告事件裁判管轄ニ非ス若クハ免訴ト爲スヘキノ具申ヲ爲シ陸軍大臣若クハ長官ノ認可アリタルトキハ言渡書ヲ作り錄事ト共ニ署名捺印シ法廷ニ臨ミ之ヲ被告人ニ讀示シ裁判管轄ニ非サルモノハ軍法會議所在ノ地ノ陸軍檢察官ニ送致シ軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ係ルモノハ上告期限盡クルノ後其地ノ檢事ニ送致シ違警事件ナルトキハ管轄ノ憲兵隊若クハ警察署ニ送致ス可シ

被告人ノ護送ヲ要スルトキハ第六條ニ從フ可シ若シ送致ス可キ地遠隔ナルトキハ

地方警察署ニ遞傳護送ヲ囑託ス可シ但便宜ニ依リ兵員ヲ以テ護送セシムルコトヲ得

第十五條 理事免訴若クハ管轄違ヒノ言渡ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ被告人所屬ノ官廨若クハ本隊及民事原告人ニ通報シ被告人收禁留置ニ係ルトキハ之ヲ監獄ニ通報ス可シ

第十六條 直チニ判決ニ付セラレタル事件ニ於テ判士長若クハ理事審問ヲ必要ト認ムルトキハ其旨ヲ命令ヲ下シタル陸軍大臣若クハ長官ニ具申スルコトヲ得

第十七條 判決ノトキニ於テ共犯附帯犯若クハ餘罪ヲ覺舉シ理事其審問ヲ爲シタルトキハ意見書ヲ出ス可シ

第十八條 軍法會議ノ判決ハ過半数ノ説ヲ以テ之ヲ決ス其説三説以上ニ分レ過半数ニ至ラサルトキハ過半数ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル説ヨリ順次利益ナル説ニ合集ス賠償ノ金額ニ關シ三説以上ニ分レ其説過半数ニ至ラサルトキハ過半数ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ノ意見ニ合算ス

第十九條 發説ノ順序ハ下級ノ者ヨリ其説ヲ述ヘ順次上級ニ遡ホル可シ若シ同級ノ者二人以上ナルトキハ其同級中新任ノ者始メニ其説ヲ述フ可シ

第二十條 被告人證人事實參考人ノ陳述前ニ陳述シタル所ト異ナルトキハ録事其要

領ヲ記録シ判士長及ヒ理事ト共ニ署名捺印シ訴訟書類ニ添置シ可シ

第二十一條 高等軍法會議ニ於テ再審ニ就キ直チニ判決ニ付スルノ命令ヲ受ケタルトキ事實明瞭ニシテ更ニ被告人證人ノ訊問ヲ要セサルモノト爲ストキハ其訊問ヲ爲サスニテ判決ヲ爲スコトヲ得但闕席裁判ニ對スル再審ハ此限ニ在ラス

其宣告ハ宣告書ヲ被告人所在ノ地ノ長官ニ移シテ其軍法會議ニ於テ之ヲ爲サシムルモノトス

違警罪ノ正式裁判ニ於テモ亦本條ノ例ニ從フコトヲ得

第二十二條 再審ノ裁判アリタルニ依リ更ニ刑ヲ執行スヘキトキハ其刑ヨリ先キニ受ケタル刑ヲ扣除スルモノトス

第二十三條 損害陸軍官署若クハ軍人ニ係ルトキハ理事被害者ニ返還賠償ノ請求ハ本案終結前ニ之ヲ爲スヘキ旨ヲ通知ス可シ

第二十四條 裁判宣告ノ時傍聽人ノ席ハ左ノ三區ニ別ツ

一 勅任官

二 奏任官

三 判任官以下

第二十五條 無罪免訴若クハ罰金科料ノ宣告アリタルトキハ理事直チニ被告人ヲ放

免ス可シ重罪ノ刑及ヒ禁錮拘留並ニ懲治場ニ留置スルノ宣告アリタルトキハ被告人ヲ監獄ニ交付ス可シ

管轄違ノ宣告アリタルトキハ其事件ヲ管轄軍法會議所在ノ地ノ陸軍檢察官ニ送致シ軍法會議ト普通裁判所ト管轄違ノ宣告アリタルトキハ上告期限盡クハノ後其事件ヲ其地ノ檢事ニ送致ス可シ

前數項ノ處分ヲ爲ストキハ裁判宣告書ヲ添ヘ收禁ニ係ラサル被告人ヲ監獄ニ交付シ其他陸軍檢察官若クハ檢事ニ被告人ヲ交付スルトキハ第六條第十四條末項ニ從ヒ護送セシメ收禁留置ニ係ル被告人ヲ放免シ及ヒ他方ニ移ストキハ其旨ヲ監獄ニ通報ス可シ

第二十六條 徒流懲役禁獄ノ刑ニ處スル者陸海軍刑法判官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法禁錮ノ刑ニ處スル將校軍屬禁錮ノ刑ニ處スル常人並ニ懲治場ニ留置スル者ノ交付ヲ受ケタルトキハ監獄長裁判宣告書ヲ添ヘ其地方監獄ニ送付ス可シ若シ其監獄遠隔ナルトキハ第十四條末項ノ例ニ從フ可シ

第二十七條 刑ノ宣告ヲ受ケタル者帶動者ニ係ルトキハ理事之ヲ長官ニ具申ス可シ高等軍法會議ニ在テハ之ヲ陸軍大臣ニ具申ス可シ長官ハ勳章年金褫奪停止取扱手續第二條第七條ニ從ヒ處分ス可シ

第二十八條 私訴ノ裁判宣告ヲ爲ストキ被害者官署ニ係リ若クハ軍人ニシテ其地ニ在ラサルトキハ其宣告書ヲ被害者ニ送致ス可シ

第二十九條 有罪無罪ヲ問ハス裁判宣告アリタルトキハ理事宣告書ヲ添ヘ被告人所屬ノ官廳若クハ本隊ニ通報シ死刑ノ執行アリタルトキハ榜示公告スヘキコトヲ郡區長ニ照會ス可シ

闕席ノマ、宣告シタルモノニ係ルトキハ其宣告書ヲ被告人ノ現住所ニ送達シ被告人營内居住ノ者ニシテ逃亡中ナルトキハ本管若クハ寄留ノ住所ニ送達ス可シ

刑ノ宣告及再審ノ裁判ニ於テ無罪免訴ノ宣告アリタルトキハ其旨ヲ被告人本籍ノ區戶長ニ通報シ他管ノ軍人ニ係ルトキハ本管軍法會議ニモ通報ス可シ

第三十條 罰金科料ノ宣告アリタルトキハ理事期限内ニ之ヲ納完セシム可シ其被告人營内居住ノ者ナルトキハ所屬隊長ニ照會シテ納完セシム其監獄ニ在ルトキハ監獄長ニ照會シ監獄長之ヲ隊長ニ照會ス可シ

第三十一條 罰金科料ヲ限内納完セサルトキハ理事禁錮若クハ拘留ニ換ヘンコトヲ判士長ニ求メ言渡書ヲ作り録事ト共ニ法廷ニ臨ミ之ヲ言渡シ監獄ニ付ス可シ被告人遠隔ノ地ニ在ルトキハ言渡書ヲ被告人所在ノ地ノ軍法會議ノ理事ニ送致シ其處ヲ求ム可シ

被告人所在ノ地ニ軍法會議ナキトキハ言渡書ヲ被告人所屬ノ長官隊長ニ送致シ言渡及執行ノ處分ヲ求ム可シ長官隊長ハ營倉ニ於テ執行ス可シ
 禁錮拘留限内罰金科料ヲ納完シタルトキハ禁錮拘留ノ言渡ヲ爲シタル者放免ノ處分ヲ爲ス可シ長官隊長及ヒ言渡書ノ送致ヲ受ケタル理事ハ納完シタル金圓ヲ添ヘ之ヲ原軍法會議ノ理事ニ通報ス可シ
 原軍法會議ノ理事自ラ放免ノ處分ヲ爲シ若クハ放免シタルノ通報ヲ受ケタルトキハ之ヲ判士長ニ通報ス可シ

第三十二條 理事前條ニ依リ被告人ヲ監獄ニ交付シ若クハ放免ノ處分ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ長官隊長監獄長ニ通報ス可シ

被告人所在ノ地ノ理事前項ノ處分ヲ爲シタルトキ亦同シ

第三十三條 闕席裁判ヲ受ケタル者其犯罪ヲ自首シ若クハ捕ニ就キ其裁判アリタルコトヲ知ラサルトキハ其自首ヲ受ケ若クハ逮捕シタル官署ニ於テ闕席裁判アリタル旨及ヒ法律ニ定ムル期限内ニ再審ノ申訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨ヲ告ク可シ其申訴ヲ爲シタル時ハ裁判宣告ヲ爲シタル軍法會議ニ申訴狀ヲ送致ス可シ

第三十四條 闕席裁判ニ依リ禁錮以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者自首若クハ捕ニ就クトキハ其宣告ヲ爲シタル軍法會議所在ノ地ノ監獄長ニ交付シ監獄長ハ之ヲ理事ニ

通報ス可シ

理事前項ノ通報ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ被告人所屬ノ官廳若クハ本隊ニ通報ス可シ再審ノ申訴ヲ爲サスシテ其期限盡キタルトキハ監獄長ニ宣告書ヲ移シ刑ノ執行ヲ爲サシム可シ

第三十五條 闕席裁判ニ係ルモノヲ除クノ外再審ニ於テ無罪免訴及ヒ原裁判ヨリ輕キ刑ノ宣告アリタルトキハ其宣告書ヲ軍法會議ノ門前ニ榜示公告ス可シ

第三十六條 錄事ハ宣告ノ年月日及ヒ刑名刑期等ヲ遺漏ナク簿冊ニ登記ス可シ

第三十七條 死刑執行ノ命令アリタルトキハ理事豫メ其期日ヲ定メ之ヲ長官ニ具申ス可シ高等軍法會議ニ在テハ之ヲ陸軍大臣ニ具申ス可シ

長官ハ醫官憲兵並ニ隊兵出場ノ處分ヲ爲シ且監獄長ヲシテ死刑執行ノ準備ヲ爲サシム可シ

第三十八條 死刑ヲ執行スルトキハ犯人ヲ刑場ニ護送シ理事監獄長醫官錄事之ニ會同シ監獄長死刑ヲ執行スル旨ヲ犯人ニ告示シタル後小銃ヲ以テ之ヲ射殺ス其護送及ヒ執行ハ本人所屬ノ隊兵一小隊ヲ以テ之ニ充テ隊外若クハ其地ニ所屬本隊アテサル者ニ係ルトキハ歩兵一小隊ヲ以テ之ニ充ツ

第三十九條 死刑ヲ行フトキ刑場ノ警戒ハ憲兵ヲシテ之ヲ爲サシメ憲兵ノ設ケナキ

地ニ在テハ衛兵ヲシテ之ヲ爲サシム可シ

第四十條 死刑執行ノ始末書ハ錄事之ヲ作り理事監獄長醫官錄事署名捺印ス可シ

第四十一條 死刑ノ執行終リタルトキハ監獄長看守長書記ヲシテ埋葬ノ處分ヲ爲サシム可シ

遺骸ノ下付ヲ請フノアルトキハ看守長書記ヲシテ其下付ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四十二條 長官ハ事變ニ際シ若クハ戰時ニ在テハ此條例ヲ變更省略スルコトヲ得

第四十三條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ノ言渡ニ對シ上告スル者アルトキハ

理事辯明書ヲ作り訴訟文書ニ添ヘ長官ヲ經由シ高等軍法會議ニ在テハ陸軍大臣ヲ

經由シ之ヲ大審院ニ送致ス可シ

第四十四條 理事特赦狀ノ下付ヲ受ケ其傳達ノ處分ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ本人所

屬ノ官廨本隊並ニ本籍ノ區戶長ニ通知ス可シ

●普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法

明治十八年五月
布告第十二號

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則

ニ抵觸スルモノハ當分施行セズ

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ

之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人

ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上

證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮

捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸軍檢

察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シ

タルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第

十二條ニ掲グルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡

ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ

言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人闘歐殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同

審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

●會同審問規則

明治十九年四月 陸軍省令乙第六十一號

明治十八年第十二號布告第五條ニ基キ會同審問規則左之通定ム

會同審問規則

第一條 會同審問ハ鎮臺司令官若クハ營所司令官ノ上申ニ依リ陸軍大臣ヨリ海軍大臣若クハ司法大臣ニ協議ノ上之ヲ開クモノトス

第二條 司令官會同審問ヲ要スルモノト認ムルトキハ意見書ニ訴訟書類ヲ添ヘ陸軍大臣ニ上申スヘシ

第三條 會同官ハ司令官之ヲ命ス若シ他管ノ者ヲ要スルトキハ陸軍大臣ニ上請スヘシ

第四條 會同官ハ豫審ニ會同スルモノトス

第五條 會同官訊問上必要ト認ムル事項ハ法廷外ニ於テ豫審判事審問委員ニ對シ訊問ヲ要求スルコトヲ得

第六條 會同官ハ審判ノ景況及ヒ雙方人心之關係等詳細ニ記録シ司令官ニ上申シ司

令官之ヲ陸軍大臣ニ申報スヘシ

●屯田兵司令部ニ軍法會議設置

明治二十二年十月 法律第二十七號

朕屯田兵司令部ニ軍法會議ヲ設クルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 屯田兵所在地ニ軍法會議ヲ設ケ北海道ヲ以テ其管轄ト爲シ屯田兵司令官ノ部下ニ屬スル軍人ノ犯罪ヲ審判セシム

其軍法會議ノ構成權限檢察復權特赦其他治罪ニ關スル手續ハ總テ陸軍治罪法ニ從フ

第二條 陸軍治罪法ニ於テ長官ノ職權ハ屯田兵司令官之ヲ行フ

第三條 佐官ヲ以テ判士長判士ト爲シ尉官ヲ以テ判士ト爲ストキハ屯田兵司令官其部下中ヨリ之ヲ命ス

其部下ニ非サル者ヲ以テ判士長判士ト爲スヲ要スルトキハ屯田兵司令官ノ上申ニ依リ陸軍大臣之ヲ命ス

第四條 陸軍檢察官ノ職務ハ屯田兵司令部副官之ヲ行フ

●陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法

明治二十三年八月 法律第六十七號

朕陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法

- 第一條 軍法會議私訴裁判ノ強制執行ハ兵營艦船若クハ軍用廳舎ニ於テ行フ場合ヲ除ク外軍法會議ノ囑託ニ因リ通常裁判所之ヲ行フ
- 第二條 軍法會議ハ軍法會議私訴裁判ノ強制執行ニ關シテ職權ニ因リ若クハ原告人又ハ被告人ノ申立ニ因リ補充及取消ノ命令ヲ爲スコトヲ得
- 第三條 軍法會議私訴裁判ノ強制執行ハ裁判決言渡書ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス前項言渡書ノ正本ハ原告人ノ請求ニ因リ軍法會議之ヲ付與ス
- 第四條 軍法會議ハ必要ト認ムル場合ニ於テ假執行假差押假處分ノ命令ヲ爲ス假執行ヲ命シタルトキハ其旨ヲ言渡書ノ正本ニ附記ス
- 第五條 第一條ニ依リ通常裁判所ニ於テ強制執行ヲ爲ストキハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

●陸軍軍人軍屬違警罪處分例

明治十九年五月 勅令第四十四號

朕陸軍軍人軍屬違警罪處分例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍軍人軍屬違警罪處分例

- 第一條 陸軍軍人軍屬ノ犯シタル違警罪ハ違警罪即決例ニ依リ憲兵部ニ於テ其處分ヲ爲シ憲兵設置ナキ地ニ於テハ警察署ニ於テ其處分爲テス可シ
- 第二條 憲兵部若クハ警察署ニ於テ被告人ヲ留置シタルトキハ直チニ其所屬ノ長官若クハ隊長ニ通知ス可シ
- 第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ軍法會議ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得其裁判管轄ハ陸軍治罪法ニ從フ
- 第四條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ違警罪即決例第五條ニ記載シタル期限内ニ其理由ヲ記シタル書面ヲ即決ノ言渡ヲ爲シタル憲兵部若クハ警察署ニ差出ス可シ
- 第五條 憲兵部若クハ警察署ニ於テ前條ノ書面ヲ受領シタルトキハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ管轄軍法會議ノ所管司令官ニ送致ス可シ
- 第六條 軍法會議ニ於テ被告人ノ訊問ヲ要セサルモノト認ルトキハ書面ニ依リ其裁判ヲ爲スコトヲ得
- 第七條 即決ノ言渡確定シ若クハ正式裁判ノ言渡ヲ爲シタルトキハ憲兵部警察署軍法會議ヨリ被告人所屬ノ長官若クハ隊長ニ其執行ヲ囑託スルコトヲ得

第八條 軍法會議ノ裁判ニ對シテ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

●舊海陸軍刑律奪官回籍ノ刑ニ該リ文武員ニ補スルヲ

禁セラレタル者解禁方

明治十八年六月
布達第十二號

舊海陸軍刑律ニ依リ奪官及ヒ回籍ノ刑ニ該リ文武大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレ又ハ
武官大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレタル者宣告ノ日ヨリ五年ヲ過クルノ後悔改ノ情狀
ニ因リ其禁ヲ解クコトアルヘシ
右布達候事

●陸軍上等兵犯罪ハ官吏ニ準シ取扱方

明治十五年八月
內閣令第二十號

陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノタメニ定メタル罪ヲ犯シタル時ハ都テ官吏ニ準シ
候義ト可相心得此旨相達候事

●罰金科料ニ處スルトキ輕禁錮拘留ニ換ヘ處分方

明治十六年十一月
布告第三十七號

陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得

●軍人軍屬犯罪ノ者遠地へ護送方

明治十八年七月
陸軍省達乙第百五號

軍人軍屬之罪犯ニシテ遠隔之地ニ護送スヘキ者アル時ハ自今地方警察署へ依頼シ遞
傳護送ス可シ此旨相達候事

但其費用ハ地方廳之請求ニ依リ依頼セシ廳ヨリ支拂フヘシ

●軍人軍屬ノ罪犯遞傳護送添書式

明治十九年一月
陸軍省達乙第九號

昨十八年^七月達乙第百五號ヲ以テ軍人軍屬ノ罪犯遞傳護送ノ儀相達置候處右發途ノ節
別紙ノ通添書ヲ附スヘシ此旨相達候事

(別紙)

傳遞狀

兵種隊號(所管)

罪名

職官位勳氏名

當何月何年何ヶ月

右頭書之犯罪ニ依リ何鎮臺(營所等)へ送附スヘキ者ニ付傳遞護送有之度候也

年月日

何鎮臺(何營所) 印

沿道 警察署

御中

所持品アル者ハ其目錄ヲ添フヘシ

●檢察及懲罪ノ處分ヲ爲スニ當リ犯人ヲ營倉又ハ監獄

ニ留置若クハ勤務停止命シ方

明治十七年四月 陸軍省達乙第二十三號

檢察處分及懲罰處分ヲ爲スニ當リ犯人ヲ營倉又ハ監獄ニ留置シ若クハ勤務ヲ停止スルコトヲ要スルトキハ其權ヲ有スル者之ヲ命スルコトヲ得ヘシ此旨相達候事
但其權ヲ有スル者現在セサル場合ニ在テハ犯人ヨリ上級ノ者假リニ之ヲ命スルコトヲ得ヘシ

●砲工兵上等監護及樂長犯罪取扱方

明治十六年一月 陸軍省達乙第八號

砲工兵上等監護及ヒ樂長犯罪取扱方之儀別紙之通被相達候條此旨相達候事
(別紙)

砲工兵上等監護及ヒ樂長陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル時ハ總テ將校ト同シク處斷スヘキ儀ト可相心得此旨相達候事

●憲兵卒職務ニ關スル犯罪處斷方

明治十五年十二月 布告第七拾三號

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

●軍用電信妨害者處分方

明治十九年四月 勅令第二十一號

朕軍用電信ニ係ル妨害者處分ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治十八年五月第八號布告電信條例第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第七十一條ノ軍用電信ニ亦之ヲ適用ス軍用電信事務ヲ奉スル者電信條例第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條ニ記載シタル罪ヲ犯シタルトキハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ又電報ノ旨意ヲ漏泄シタルトキハ電信條例第六十八條第二項ニ依リ處斷ス

(第二十三類六十四子電信條例參看)

電信條例第五十八條第六十二條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ普通刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

○海軍刑事

●海軍刑法

明治十四年十二月
布告第七十號

海軍刑法別冊ノ通改定シ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別冊略ス)

●海軍治罪法改正

明治二十二年二月
法律第五號

朕海軍治罪法ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍治罪法左ノ通改正シ明治二十二年三月十五日ヨリ施行ス

海軍治罪法

第一章 總則

第一條 軍人ノ犯シタル重罪輕罪ノ審判ハ軍法會議ニ於テ之ヲ爲ス

海軍官署若クハ軍人ノ損害ニ係ル本案附帶ノ私訴アルトキハ軍法會議ニ於テ之ヲ

●海軍治罪法
中增加改正
明治二十二年
十月
法律第二十六
號
朕海軍治罪法中改
正ノ件ヲ裁可シ茲
ニ之ヲ公布セシム
海軍治罪法中左
ノ通改正ス第一
條審判ノ下ニ一
及ヒ違警罪ノ正
裁シノノ下ニ一
加シ第二十一條第
二條第二十五條第
二十六條第二十七條
第三十二條ニ記載
シタル重罪輕罪ノ
審判ノ下改ム

審判ス

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其裁判宣告ヲ爲ストキハ軍人ニ限り之ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ海軍刑法第五十條第五十一條ニ記載シタル者ヲ謂フ

陸軍軍人ト稱スルハ陸軍刑法第三條第九條ニ記載シタル者ヲ謂フ

第四條 長官ト稱スルハ海軍大臣及ヒ司令官ヲ謂フ

司令官ト稱スルハ鎮守府司令長官艦隊司令長官艦隊司令官分遣艦隊司令官及ヒ合

團ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 親屬ト稱スルハ普通刑法第百十四條第百十五條ニ記載シタル者ヲ謂フ

第六條 普通治罪法第九條第十條第十一條第十二條第十三條第十四條第十八條第三

十九條第百條第百一條第百三十三條第三項第百四十六條第百五十六條第二百六十

一條第一項ハ此治罪法ニ於テ之ヲ適用ス

第七條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ召集中ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得

第八條 臨戰合團ノ地ニ於テハ司令官審判ノ手續ヲ省略スルコトヲ得

第二章 軍法會議ノ構成

第九條 軍法會議ヲ設クルコト左ノ如シ

東京軍法會議
 鎮守府軍法會議
 艦隊軍法會議
 高等軍法會議
 合圍地軍法會議
 東京軍法會議及ヒ各鎮守府軍法會議ハ常設ト爲シ艦隊軍法會議ハ臨時各艦隊ニ之ヲ設ケ高等軍法會議ハ臨時東京ニ之ヲ設ケ合圍地軍法會議ハ臨戰合圍ノ戒嚴間之ヲ設ク

第十條 軍法會議ハ判士長判士主理若クハ主理試補及ヒ錄事ヲ以テ構成ス
 第十一條 判士長判士ハ高等軍法會議ニ於テハ第一表ニ據リ他ノ軍法會議ニ於テハ第二表ニ據リ將校ヲ以テ之ニ充ツ
 臨戰合圍ノ間ニ於テハ判士二名ヲ減スルコトヲ得

第一表

判士	長判	士	被告	人
佐官	一名	尉官	四名	陸海軍下士以下ノ軍人

○第五十一類 外交

○外交

●海外各邦ト和親條約ヲ結ヒ上下一致ヲ旨トス

明治元年正月十五日

外國之儀ハ先帝多年之 宸憂ニ被爲在候處幕府從來ノ失錯ニヨリ因循今日ニ至リ候折柄世態大ニ一變シ大勢誠ニ不被爲得己此度 朝議之上斷然和親條約被爲取結候就テハ上下一致疑惑ヲ不生大ニ兵備ヲ充實シ國威ヲ海外萬國ニ光耀セシメ 祖宗先席之 神靈ニ對答可被遊 慮慮ニ候間天下列藩士民ニ至ル迄此旨ヲ奉戴心力ヲ盡シ勉勵可有之候事
 但是迄於幕府取結候條約之中弊害有之候件々利害得失公議之上御改革可被爲在候猶外國交際之儀ハ字内之公法ヲ以取扱可有之候間此段相心得可申候事

(參考)安政元年三月三日

日本國米利堅合衆國和親條約

亞墨利加合衆國ト帝國日本兩國ノ人民誠實不朽ノ親睦ヲ取結ヒ兩國人民ノ交親ヲ旨トシ向後可守箇條相立候ヲメ合衆國ヨリ全權マッセウ、カルブレズ、ベルリ(人名)ヲ日

本ニ差越シ日本國主ヨリ全權林大學頭井戸對島守伊澤美作守鶴殿民部少輔ヲ差遣シ勅諭ヲ信シテ雙方左ノ通取極候

第一條 日本ト合衆國トハ其人民永世不朽ノ和親ヲ取結ヒ場所人柄ノ差別無之事

第二條 伊豆下田松前地箱館ノ兩港ハ日本政府ニ於テ亞墨利加船薪水食料石炭欠乏

ノ品ヲ日本人ニテ調候丈ハ給シ候タメ渡來ノ儀差免シ候尤下田港ハ約定書面調印ノ上即時相開キ箱館ハ來年三月ヨリ相始候事

給スヘキ品物直段書ノ儀ハ日本役人ヨリ相渡可申右代料ハ金銀錢ヲ以テ可相辨候事

第三條 合衆國ノ船日本海濱漂著ノ時扶助致シ其漂民ヲ下田又ハ箱館ニ護送致シ本國ノ者受取可申所持ノ品物モ同様ニ可致候尤漂民諸雜費ハ兩國互ニ同様ノ事故不及償候事

第四條 漂著或ハ渡來ノ人民取扱ノ儀ハ他國同様緩優ニ有之閉籠候儀致問敷乍併正直ノ法度ニハ伏從致シ候事

第五條 合衆國ノ漂民其他ノ者共當分下田箱館逗留中長崎ニ於テ唐和蘭人同様閉籠窮屈ノ取扱無之下田港内ノ小島周リ凡七里ノ内ハ勝手ニ徘徊致シ箱館港ノ儀ハ追テ取極候事

第六條 必用ノ品物其外可相叶事ハ雙方談判ノ上取極候事

第七條 合衆國ノ船右兩港ニ渡來ノ時金銀錢並品物ヲ以テ入用ノ品相調候ヲ差免シ候尤日本政府ノ規定ニ相從可申且合衆國ノ船ヨリ差出候品物ヲ日本人不好シテ差返候時ハ受取可申事

第八條 薪水食料石炭並缺乏ノ品求ムル時ニハ其地ノ役人ニテ取扱スヘク私ニ取引スヘカラサル事

第九條 日本政府外國人ハ當節亞墨利加人ハ不差許候儀相許シ候節ハ亞墨利加人ハモ同様差許可申右ニ付談判猶豫不致候事

第十條 合衆國ノ船若シ難風ニ逢サル時ハ下田箱館兩港ノ外獵ニ渡來不致候事

第十一條 兩國政府ニ於テ無據儀有之候時ハ模様ニ寄リ合衆國官吏ノ者下田ニ差置候儀モ可有之尤約定調印ヨリ十八箇月後ニ無之候テハ不及其儀候事

第十二條 今般ノ約定相定候上ハ兩國ノ者堅ク相守可申尤合衆國主ニ於テ長公會大臣ト評議一定ノ後書ヲ日本大君ニ致シ此事今ヨリ後十八箇月ヲ過スシテ君主許容ノ約定取換セ候事

右ノ條日本亞墨利加兩國ノ全權調印セシムル者也
林 大學 頭 花押

嘉永七年三月三日

千八百五十四年三月三十日

井戸 對馬 守花押
伊澤 美作 守花押
勲 殿民部少輔 花押
マッセウ、カルブレズ、ペルリ 手記

(以上明治元年前ニ係ル各國條約書ハ之ヲ略ス)

●東京在留外國人遊歩規程

明治三年閏十月
布告第七百三十五號

東京在留外國人遊歩規程別紙ノ通ニ候條此旨相達候事

(別紙)

東京在留外國人遊歩ノ規程別紙圖面ノ通新利根川又江戸川口ヨリ北ノ方金町迄夫ヨリ西ノ方水戸街道千住宿大橋迄夫ヨリ隅田川ヲ登リ古谷上郷迄夫ヨリ小室村高倉村小矢田村萩原村宮寺村三木村田中村諸村ヨリ朱引ノ通日野ノ渡場迄夫ヨリ玉川口迄ヲ以テ限リトシ右區内ハ外國人共遊歩御差許之儀ニ付勝手ニ徘徊イタスハシ就テハ彼我禮義モ異リ殊ニ彼方貴人モ手輕ニ旅行イタシ候振合ニテ在々之人民未タ外國人之情態ヲモ熟知セサル故接對方ニ於テ不都合ノ筋ハ勿論不作法等有之候テハ不相濟儀ニ付未々迄相互ニ心附兼テ御布令ノ趣心得違無之様可致事

一外國人遊歩ノ節若途中ニオイテ休息又ハ薄暮ニオヨヒ止宿等相望候ハ、所役人方
一案内イタシ差支無之場所ニ候ハ、望通取計可遣旅籠代之儀ハ相對テ以テ請取可
申事

一外國人出先ニオイテ差掛リ人足履度旨申出候ハ、相當之賃錢請取身元相分リ居候
モノ差出候様可致事

一外國人共門塲等アル場所ハ勿論招キニアラシテ人家へ猥リニ不立入等ニ候得共
若シ庭構園池等一見イタシ度旨申聞候ハ、立入不苦場所へハ案内致スヘク差支有
之場所ハ相斷可申事

一社寺ハ庶人立入拜禮致候場所迄立入候儀ハ不苦靈秘ニイタシ庶人猥リニ不爲立入
場所其餘廟所墳墓又ハ境内締切之場所ハ相斷可申尤モ彼方懇望ニテ其主司ニタイ
テモ強テ差支無之候ハ、臨機ノ取計ヲ以テ差許候トモ不苦事

一東京開市場之外諸村ニタイテハ外國人ト商賣取引不相成筋ニ候得共通行ノ節聊ノ
土産物等買得ノ儀相望候ハ、賣渡候テ不苦万一拔荷密商等ノ所業ニ及ヒ候ハ、屹
度答可申付候條若拔荷密商等見出シ候歟又ハ企候モノ有之ヲ承リ込候ハ、速ニ東
京府又ハ其支配ノ役所へ可訴出其品ニ寄御褒美可被下事
一宗門之儀前々ヨリ之御法度相守彌以堅ク可相制若異宗門之附イタシ又ハ申勸候モ

ノ等有之候ハ、其段早速其支配之役所へ可訴出事

一阿片煙草吸喫致候儀ハ嚴禁ニ付萬一竊ニ相用候歟又ハ所持イタシ候歟或ハ外國人ヨリ密ニ買取候モノ及見聞候ハ、前同様可訴出事

一外國人ニ對シ乱暴狼籍ニ及ヒ候テハ禮義ヲ失ヒ候耻辱ノミナラス第一御威光ニモ相拘リ以ノ外ノ事ニ付兼テ御布令モ有之今後右様心得違ノ者ハ無之等ニ候得共町村ニオイテモ兼テ手等申合セ置萬一狼籍ニ及候者有之節ハ所ノモノ打寄擲取若シ手ニ餘リ候ハ、打果シ候トモ不苦候若シ取逃シ候ハ、地元町村ヨリ時刻ヲ不移其支配ノ役所並東京府へ口上ヲ以テ成トモ手分ケイタシ迅速ニ可届出候其餘詮議ノ手掛ニ可相成儀等及見聞候ハ、聊ノ事ニテモ不隱置是又早々可申出品ニ寄夫々御褒美可被下事

附乱妨ヲ受候外國人之國名姓名等相分リ候丈ケ承亂シ可申立且當人ハ手當行届候丈ケ介抱致シ精々心附可遣萬一絶命ニ及候ハ、大切ニ守護イタシ差圖相待可申事

右之條々急度可相守若シ後日之引合ヲ通レンタメ及見聞候儀ヲ押隠シ追テ相顯ル、ニオイテハ當人ハ勿論所役人迄モ夫々嚴重答申付候條心得違無之様可致自今以後毎年一度ツ、其所役人ヨリ前書ノ趣小前ノモノへ爲讀聞無遺失様可相守者也

●海外旅券規則

明治十一年二月
外務省布達第一號

從來當省ヨリ發行候海外行免狀ノ儀海外旅券ト改稱別紙規則相定候條此旨布達候事
(別紙)

海外旅券規則

旅券ハ日本國民タルヲ證明スルノ具ニシテ海外各國ニアリテ要用少ナカラサルヲ以テ外務省ヨリ之ヲ發行ス規則左ノ如シ

第一條 旅券ヲ請フ者ハ別紙雛形ノ書面ヲ以テ外務省マタハ開港場管廳へ願ヒ出テ之ヲ受取ルヘシ右郵便ヲ以テスルモ苦シカラス旅券ヲ受取ラハ直ニ其示アル所へ當人姓名ヲ自記スヘシ

第二條 旅券ヲ受ルモノハ手數料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ但旅券ハ一人一枚ニ限ルヘシ若シ五歳以下ノ小兒其父母同道ナルトキハ其父母ノ旅券ニ附記スルヲ以テ足レリトス

第三條 内地ニ於テ右旅券受取ル間合之ナキカ又ハ海外ニ於テ遺失シタルカノトキハ其國在留ノ日本公使館又ハ領事館へ其趣ヲ記載セス書面ヲ出シ自身出頭シテ願ヒ受シヘシ

但其手数料トシテ金貳圓ヲ納ムヘシ

第四條 公用ヲ以テ旅行シ官費ヲ以テ留學スル者ハ内地ニ在リテハ其管廳ヨリ直ニ外務省ニ掛合海外ニ在リテハ前條ノ趣ニ從ヒ旅券ヲ受取ルヘシ

但手数料ハ納ムルニ及ハス

第五條 旅券ハ其赴クヘキ國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ得ル儀其國ニヨリ要用少ナカラス其館ハ其館ニ就テ直ニ之ヲ請フヘシ

但其定規ニ從ヒ手数料ヲ拂フヘキモノトス

第六條 海外ニアリテ所持ノ旅券我領事官ノ證明ヲ要用トスルコトアリ其館ハ之ヲ請ヒ得ヘシ

但領事官ナキ地ニ於テハ公使館ニ至リテ之ヲ請フヘシ

第七條 旅券ハ歸朝ノ後三十日以内ニ其最初受取タル管廳ヘ之ヲ返納スヘシ

郵船等ノ海員常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニアラス

但海外ニアリテハ我公使又ハ領事館ヨリ受取タル者ハ外務省ニ返納スルヲ以テ足レリトス

(別紙雛形)

旅券願書式

私儀何々ノ爲某國ヘ罷越或ハ往來致度ニツキ旅券御渡方奉願候也

何府縣下
第何大區何小區
何國何郡何町村何番地又ハ寄留
士族屬職業

明治 年 月 日

何 姓 名 印
年何年何ヶ月

外務省又ハ何府縣御中

右之通相違無之候也

戶長姓名印

府知事縣令姓名印

前書之通證明候也

上封

族券願
外務省或ハ某府縣
御中

何府縣下
何國何郡何町村
何 誰

旅券文言
官印

右ニ趣クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレンコトヲ
其筋ノ諸官ニ希望ス

年 月 日

日本皇帝陛下官位姓名自記

所持人 姓名 自記

右ハ官員及官費留學生ニ與フル式タリ

籍

當 人 姓 名

齡

右ノ者故障ナク通行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス

年 月 日

日本帝國官位姓名自記

所持人 手 記

右ハ華士族平民ニ與フル者ナリ共ニ英佛獨魯清文ヲ譯付ス

●海外旅行手續

明治十一年五月
布告第九號

明治二年四月同三年正月布告海外行印鑑免狀渡方ノ儀及同九年^十第二百二十八號
布告中海外行免狀ノ廢止候條自今外務省本年一月第一號布達海外旅券規則ニ照
準スヘシ此旨布告候事

●修好條規

明治九年三月
布告第三拾四號

今般朝鮮國ト別冊ノ通り條約取結相成候條此旨布告候事

(別冊)

修好條規

大日本國 大朝鮮國ト素ヨリ友誼ニ敦ク年所ヲ歷有セリ今兩國ノ情意未タ洽チカラ
サルヲ視ルニ因テ重テ舊好ヲ修メ親睦ヲ固フセント欲ス是ヲ以テ日本國政府ハ特命
全權辨理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆特命副全權辨理大臣議官井上馨ヲ簡
ミ朝鮮國江華府ニ詣リ朝鮮國政府ハ判中樞府事申樞都總府副總管尹滋承ヲ簡ミ各奉
スル所ノ諭旨ニ遵ヒ議立セル條款ヲ左ニ開列ス
第一款 朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有セリ爾後兩國和親ノ實ヲ

表セント欲スルニハ彼此互ニ同等ノ禮義ヲ以テ相接待シ毫モ侵越猜嫌スル事アルヘカラス先ツ從前交情阻塞ノ患ヲ爲セシ諸例規ヲ悉ク革除シ務メテ寬裕弘通ノ法ヲ開擴シ以テ雙方トモ安寧ヲ永遠ニ期スヘシ

第二款 日本國政府ハ今ヨリ十五箇月ノ後時ニ隨ヒ使臣ヲ派出シ朝鮮國京城ニ到リ禮曹判書ニ親接シ交際ノ事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留滯シ或ハ直ニ歸國スルモ共ニ其時宜ニ任スヘシ朝鮮國政府ハ何時ニテモ使臣ヲ派出シ日本國東京ニ至リ外務卿ニ親接シ交際ノ事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留滯シ或ハ直ニ歸國スルモ又其時宜ニ任スヘシ

第三款 爾後兩國相往復スル公用文ハ日本ハ其國文ヲ用ヒ今ヨリ十年間ハ添フルニ譯漢文ヲ以テシ朝鮮ハ眞文ヲ用フヘシ

第四款 朝鮮國釜山ノ草梁項ニハ日本公館アリテ年來兩國人民通商ノ地タリ今ヨリ從前ノ慣例及歲遣船等ノ事ヲ改革シ今般新立セル條款ヲ憑準トナシ貿易事務ヲ措辦スヘシ且又朝鮮國政府ハ第五款ニ載スル所ノ二口ヲ開キ日本人民ノ往來通商スルヲ准聽スヘシ右ノ場所ニ就キ地面ヲ賃借シ家屋ヲ造營シ又ハ所在朝鮮人民ノ居室ヲ賃借スルモ各其隨意ニ任スヘシ

第五款 京^{キョウ}圻^{キョウ}忠^{チュウ}清^{セイ}全^{セン}羅^ラ慶^{ケイ}尙^ウ成^{セイ}鏡^{キョウ}五^ウ道^{ドウ}ノ沿海ニテ通商ニ便利ナル港口二箇

所ヲ見立タル後地名ヲ指定スヘシ開港ノ期ハ日本曆明治九年二月ヨリ朝鮮曆丙子年正月ヨリ共ニ數ヘテ二十箇月ニ當ルヲ期トスヘシ

第六款 爾後日本國船隻朝鮮國沿海ニ在テ或ハ大風ニ遭ヒ又ハ薪糧ニ窮渴シ指定シタル港口ニ達スル能ハサル時ハ何レノ港灣ニテモ船隻ヲ寄泊シ風波ノ險ヲ避ケ要用品ヲ買入レ船具ヲ修繕シ柴炭類ヲ買求スルヲ得ヘシ勿論其供給費用ハ總テ船主ヨリ賠償スヘシト雖トモ是等ノ事ニ就テハ地方官人民具ニ其困難ヲ體察シ眞實ニ憐恤ヲ加ヘ救援至ラサルナク補給敢テ吝惜スル無ルヘシ倘又兩國ノ船隻大洋中ニテ破壊シ乗組人員何レノ地方ニテモ漂着スル時ハ其地ノ人民ヨリ即刻救助ノ手續ヲ施シ各人ノ姓名ヲ保全セシメ地方官ニ届出該官ヨリ各本國ヘ護送スルカ又ハ其近傍ニ在留セル本國ノ官員ヘ引渡スヘシ

第七款 朝鮮國ノ沿海嶋嶼岩礁從前審檢ヲ經サレハ極メテ危險ト爲スニ因リ日本國ノ航海者自由ニ海岸ヲ測量スルヲ准シ其位置深淺ヲ審ニシ圖誌ヲ編製シ兩國船客ヲシテ危險ヲ避ケ安穩ニ通スルヲ得セシムヘシ

第八款 爾後日本國政府ヨリ朝鮮國指定各口ヘ時宜ニ隨ヒ日本商民ヲ管理スルノ官ヲ設ケ置クヘシ若シ兩國ニ交渉スル事件アル時ハ該官ヨリ其所ノ地方長官ニ會商シテ辨理セン

第九款 兩國既ニ通好ヲ經タリ彼此ノ人民各自己ノ意見ニ任セ貿易セシムヘシ兩國官吏毫モ之レニ關係スル事無シ又貿易ノ制限ヲ立テ或ハ禁沮スルヲ得ス倘シ兩國ノ商民欺罔術賣又ハ貸借償ハサル事アル時ハ兩國ノ官吏嚴重ニ該通商民ヲ取糾シ債欠ヲ追辨セシムヘシ但兩國ノ政府ハ之ヲ代償スルノ理無シ

第十款 日本國人民朝鮮國指定ノ各口ニ在留中若シ罪科ヲ犯シ朝鮮國人民ニ交涉スル事件ハ總テ日本國官員ノ審斷ニ歸スヘシ若シ朝鮮國人民罪科ヲ犯シ日本國人民ニ交涉スル事件ハ均シ朝鮮國官員ノ查辨ニ歸スヘシ尤雙方共各其國律ニ據リ裁判シ毫モ回護袒庇スル事ナク務メテ公平允當ノ裁判ヲ示スヘシ

第十一款 兩國既ニ通好ヲ經タレハ別ニ通商章程ヲ設立シ兩國商民ノ便利ヲ與フヘシ且現今議立セル各款中更ニ細目ヲ補添シテ以テ遵照ニ便ニスヘキ條件共自今六箇月ヲ過スシテ兩國別ニ委員ヲ命シ朝鮮國京城又ハ江華府ニ會シテ商議定立セシ

第十二款 右議定セル十一款ノ條約此日ヨリ兩國信守遵行ノ始トス兩國政府復之レヲ變革スルヲ得ス以テ永遠ニ及ホシ兩國ノ和親ヲ固フスヘシ之レカ爲メニ此約書ニ本ヲ作り兩國委任ノ大臣各鈐印シ相互ニ交付シ以テ憑信ヲ昭ニスルモノ也

大日本國特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官 黑田清隆 印

大日本國特命副全權辦理大臣議官

大朝鮮國開國四百八十五年丙子二月初二日

大朝鮮國太官判中樞府事

大朝鮮國副都總府副總管

井上馨 印

申 樅 印

半 滋 承 印

●修好條規續約

明治十五年十一月 布告第五拾四號

今般朝鮮國ト別紙ノ通修好條規續約ヲ訂定交換ス

右奉 勅旨布告候事

(別紙)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル

大日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス大日本國辦理公使花房義質及大朝鮮國全權大臣李裕元全權副官金宏集ヲ以テ雙方全權委員ト爲シ明治十五年八月三十日朝鮮國濟物浦ニ於テ大日本國ト大朝鮮國トノ間ニ取結ヒシ修好條規續約書ヲ朕親ラ閱覽セシニ能シ朕カ意ニ適シ更ニ間然スヘキナシ故ニ凡テ其約書條款ニ掲クル本趣ハ朕茲ニ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百四十二年

明治十五年十月三十日東京宮中ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム
御名 御璽

奉勅 外務卿正四位勳一等 井上 馨

大日本國辦理大臣花房義質ト大朝鮮國全權大臣李裕元副大臣金宏集ト明治十五年八月三十日(朝鮮國四百九十一年七月十七日)仁川府濟物浦ニ在テ商訂シタル追加條約ヲ今兩國ノ批准ヲ經テ大日本外務卿井上馨ト大朝鮮國特命全權大臣兼修信使朴泳孝副大臣金晚植ト東京ニ於テ互ニ相查照シ以テ之ヲ交換シ各名ヲ署シ印ヲ鈐シ以テ證トナス

大日本國明治十五年十月三十一日 大日本國外務卿 井上 馨

大朝鮮國開國四百九十一年九月廿日 大朝鮮國特命全權大臣兼修信使朴泳孝

大朝鮮國副大臣 金 晚 植

日本國ト朝鮮國ト爾後益々親好ヲ表シ貿易ヲ便ニスル爲メ茲ニ續約ニ款ヲ訂定スルコト左ノ如シ

第一 元山釜山仁川各港ノ間行里程今後擴メテ四方各五十里ト爲シ(朝鮮里法)二年ノ後ヲ期シ(條約批准ノ日ヨリ周歲ヲ算シテ一年ト爲ス)更ニ各百里ト爲ス事
第二 日本國公使領事及ヒ其隨員眷從ノ朝鮮内地各處ニ遊歷スルヲ任聽スル事

遊歷地方ヲ指定シ禮曹ヨリ證書ヲ給シ地方官證書ヲ驗シテ護送ス右兩國全權大臣各々諭旨ニ據リ約ヲ立テ印ヲ蓋シ更ニ批准ヲ請ヒ二箇月ノ内(日本明治十五年十月朝鮮開國四百九十一年九月)日本東京ニ於テ交換スヘシ
大日本國明治十五年八月三十日
大朝鮮國開國四百九十二年七月十七日

日本國辦理公使 花房 義 質 印
朝鮮國全權大臣 李 裕 元 印
朝鮮國全權副官 金 宏 集 印

●朝鮮國間行里程取極約書 明治十六年十月 布達第三十二號

朝鮮國間行里程取極約書別紙ノ通り訂定ス
右布達候事

(別紙)

朝鮮國間行里程取極約書

第一條 兩國政府(日本曆明治十五年八月三十一日 各全權大臣ノ議定シタル續約第一款ノ旨趣ニ依リ朝鮮國仁川元山釜山ノ三港ニ於テ今年可取廣間行里程ヲ雙方委任ノ大

臣協議ノ上左ノ通り定メタリ

第二條

仁川港

東ハ安山始興果川ヲ限ル

東北ハ陽川金浦ヲ限ル

北ハ江華島ヲ限ル

元山港

西ハ德源府管下馬息嶺ヲ限ル

南ハ安邊府管下古龍池院ヲ限ル

北ハ文川郡管下業加直ヲ限ル

釜山港

東ハ機張ヲ限ル

西ハ金海ヲ限ル

南ハ鳴湖ヲ限ル

北ハ梁山ヲ限ル

右ニ定メタル各地ノ境界ニハ兩國官吏立會ノ上標木ヲ立テ以テ四方ノ限止ヲ明カ

ニスヘシ

第三條 來ル日本曆明治十七年朝鮮曆甲申年更ニ擴張スヘキ里程ノ境界ハ其期ニ至

リ兩國委員議定ノ上此約書ノ附録ト爲スヘシ

第四條 此里程内ニ於テ日本人隨意遊獵スルヲ得ルト雖トモ人家接近ノ地並ニ朝鮮

政府ノ禁制スル場所ニ於テ發銃スヘカラス

第五條 日本人此里程内ニ在テ或ハ暴行ヲナシ又ハ境界ヲ踰越スル者アル時ハ地方

官吏ニテ之ヲ取押ヘ日本領事館ニ送交シ或ハ其地ニ引留置領事官ニ通知シ處分ヲ

ナサシムヘシ但シ引留又ハ送致ノ際苛虐ノ取扱ヲ爲ス可ラサルハ勿論引留時間ハ

領事館往復ニ必要ナル時間ニ限ルヘシ

第六條 此里程内ニ於テ朝鮮人往來ノ日本人ニ對シ暴行ヲ爲ス者アレハ地方官速ニ

吏ヲ派シ之ヲ救護シ其暴行人ヲ嚴罰スヘシ

第七條 日本人ノ間行ノ際或ハ日暮歸ル能ハス或ハ途中疾病事故等有テ行ク能ハサ

ル者ニ遇ハ沿路ノ人民其請ニ應シテ驛馬ヲ雇ヒ或ハ其家ニ休宿セシムル等懇切ノ

取扱ヲ爲スヘシ但シ其驛馬費宿料等ハ該日本人ヨリ完済ス可シ

第八條 第四條ヨリ以下ノ諸條ハ朝鮮政府ニテ里程内ノ鄉村及道路ニ揭示シ人民ヲ

シテ能ク遵奉セムヘシ

右確實ナルヲ証シ兩國ノ各委任大臣記名調印スル者也

大日本明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使 竹添進一郎 印
全權大臣督辦交涉通商事務閱泳穆 印

●朝鮮國間行里程取極書附錄

明治十八年一月
布達第二號

朝鮮國間行里程取極約書附錄別紙ノ通訂定ス

右布達候事

(別紙)

朝鮮國間行里程取極約書附錄

茲ニ日本明治十六年七月二十五日 取極タル本約書第三條ニ據リ今年更ニ擴開スヘキ間行
里程ノ境界ヲ兩國委員會同議定シテ左ニ開列ス

仁川港

南ハ南陽水原龍仁廣州ヲ限ル

東ハ京城東中浪浦ヲ限ル

元山港
西北ハ坡州交河通津江華ヲ限ル
西南ハ永宗大阜小阜ノ各島ヲ限ル

北ハ永興ヲ限ル

西ハ文川ノ終境ヲ限ル

南ハ淮陽通川ヲ限ル

釜山港

東ハ南倉ヲ限ル

北ハ彦陽ヲ限ル

西ハ昌原馬山浦(三浪倉ヲ限ル)

南ハ天城島ヲ限ル

右確實ナルヲ証シ兩國ノ委任大臣記名調印シ以テ朝鮮國間行里程取極約書ノ附錄ト
爲ス者ナリ

大日本國明治十七年十一月二十九日

大朝鮮國開國四百九十三年十月十二日
委任大臣辦理公使 竹添進一郎 印
委任大臣督辦交涉通商事務金宏集 印

●朝鮮國漢城へ渡航通商スルヲ得

明治十八年五月
外務省告示第四號

今般朝鮮國政府於テ同國漢城ヲ開市場ト相定候條本年三月十二日以後該場へ渡航通商スルヲ得ヘシ
右告示候事

●朝鮮國トノ貿易ハ總テ外國貿易ノ手續ニ依ル

明治十六年十二月
布告第四拾號

明治七年二月一日ヨリ明治九年十月第百貳拾九號布告ヲ廢止候條朝鮮國トノ貿易ハ總テ他ノ外貿易國ノ手續ニ依ルヘシ
但當分ノ内各開港場ノ外長崎縣下對馬國嚴原山口縣下長門ノ國下ノ關福岡縣下筑前國博多ノ三港ニ限リ朝鮮國貿易ニ關スル日本人所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ積卸ヲ許シ日本形船舶ニ限リ出港手数料トシテ正金壹圓入港手数料トシテ正金貳圓ヲ徵收ス
右奉 勅旨布告候事

●朝鮮國へ旅行者旅券出願方

明治十一年三月
外務省布達第二號

本年二月二十日第一號達海外旅券規則第一條外務省又ハ開港場官廳ト掲載有之候處朝鮮國へ旅行候者ニ限リ左ノ縣廳へ願出旅券受取候テ不苦候條此旨布達候事
廣島 山口 島根 福岡 鹿兒島 長崎嚴原支廳

●朝鮮國行步規程違反者罰則

明治十六年四月
布告第十一號

朝鮮國ニ於テ行步規程ヲ犯シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
右奉 勅旨布告候事

●朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

明治十六年十月
布達第三十三號

朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則別紙ノ通協議決定ス
右布達候事

(別紙)

約定シタル朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

第一條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ日本國人朝鮮國ノ法禁ヲ犯シタルトキハ水陸共左ノ箇條ニ照シ取扱フ可シ

第二條 朝鮮國官吏ハ法禁ヲ犯セル日本國人ヲ取押ヘタルトキハ其罪證ヲ具録シ之ヲ添テ其日本人ヲ最寄開港場ノ日本領事官ヘ引渡シ相當ノ處分ヲ要求スヘシ日本領事官ハ速ニ其要求ニ應シ之ヲ審査シ照律處斷スヘシ但シ朝鮮國官吏取押ヘ又ハ護送ノ際苛虐ノ取扱ヲナスコト無ル可シ

第三條 犯罪ト認ムヘキ日本人ヲ海陸孰レヨリ護送スルモ朝鮮官吏ノ勝手タルヘシ但シ成丈速カニ護送シ事故ナクシテ徒ニ罪犯ヲ其地ニ淹留スヘカラス

第四條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ罪ヲ犯セシト認ムル日本人ヲ海路ヨリ護送スルトキハ朝鮮官吏日本人ノ船舶ニ乗込或ハ別船ニ在テ之ヲ引來ル俱ニ其便宜ニ任ス如シ陸路ヨリ護送スルトキハ其日本船ハ逐テ引渡ス迄ノ間ハ地方官ニテ之ヲ監守シ毀失セシムルコト無ルヘシ且其船具漁具其外運搬シ難キ物品ハ目錄ニ作り罪犯ニ添テ之ヲ送付スヘシ

第五條 若シ薪水食糧ヲ得ルカ爲メ又ハ獲タル所ノ魚類ヲ賣買スル爲メ上陸シ陸上ニ於テ其犯罪同行中若干名ノミニ係ルトキハ其若干名ノミニテ此手續ニ依テ護送シ其他ハ之ヲ拘引スルコト無ルヘシ又海上ナレハ其罪犯ヲ除クノ外殘員猶航海ニ堪

ルトキハ朝鮮官吏ハ其罪犯ノミニテ護送シ其他ハ之ヲ放還スヘシ

第六條 此規則ハ實行ノ上更ニ増損スヘキモノ有レハ双方協議改正スルヲ得ヘシ右確實ナルヲ證シ兩國ノ各委任大臣茲ニ記名調印スルモノ也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使 竹添進一郎 印
全權大臣督辦交涉通商事務閣泳穆 印

●朝鮮國官民今後同國政府及各官署ノ名等ヲ以テ我國人民ト約條ヲ訂立スルモ該統理衙門蓋印スルニ非ラザレハ私約ト見做ス

明治十八年九月
外務省告示第九號

凡朝鮮國官民ニ於テ今後同國政府及各官署ノ名或ハ其委任ヲ奉シタル旨ヲ以テ我國人民ト約條ヲ訂立スルモ該國統理衙門ヨリ蓋印スルニ非ラザレハ私約ト視做シ朝鮮政府及該衙門ハ代認スル能ハサル旨朝鮮曆乙酉六月二十二日我明治十八年八月三日附公文ヲ以テ該國政府ヨリ通知アリタリ

右告示候事

●帝國ト朝鮮國トノ間ニ於ケル漂民經費償還法改正

明治二十年六月
勅令第二十一號

朕帝國ト朝鮮國トノ間ニ於ケル漂民經費償還法ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
一帝國ト朝鮮國トノ間ニ於テ此國政府ニテ彼國漂民ヲ救護解送シ衣食ヲ給與シ傷病
ヲ醫治シ屍身ヲ埋葬スルカ爲メニ出ス所ノ諸費用ハ彼國政府ヨリ實費ヲ計算シテ
償還ス可シ
一船隻ヲ救護シ貨物ヲ打撈スルノ費用ハ原主ヨリ償還シ相互ニ其政府ニ向テ請求ス
ルヲ得ス

●帝國ト朝鮮國トノ間ニ於ケル漂民經費償還法ノ内原

主ニ屬スル償還手續
明治二十年八月
外務省令第二號

本年六月勅令第二十一號帝國ト朝鮮國トノ間ニ於ケル漂民經費償還法ノ内原主ニ屬ス
ル償還手續ヲ定ムルコト左ノ如シ
船隻ヲ救護シ貨物ヲ打撈スルノ費用ハ該船貨ヲ以テ原主ニ還附スル時原主ヨリ數ニ
照シテ償還ス可シ若シ其時原主通貨ヲ所持セサレハ該船貨ヲ賣却シ其代價ヲ以テ之

ヲ償還スルカ又ハ直ニ該船貨ヲ交附シテ償還ニ充ツ可シ但船貨交附ノ場合ニ於テ不
足アルモ船貨悉皆ヲ交附スルニ止メ其餘ヲ追徴スルヲ得ス

●日本朝鮮兩國通漁規則
明治二十三年一月八日
勅令無號

朕帝國ト朝鮮國トノ通漁規則ヲ締結シタルニ依リ茲ニ之ヲ公布セシメ明治二十三年
一月十一日ヨリ施行セシム

日本
朝鮮
兩國通漁規則

大日本國政府ハ日本明治十六年七月二十五日朝鮮開國四百九十二年六月二十二日兩
國全權大臣ノ協議訂定セル朝鮮國貿易規則第四十一款ニ據リ兩國海濱ニ往來捕魚ス
ル者ノタメニ漁業稅ヲ定メ取締規則ヲ立ルヲ必要トシテ日本政府ハ代理公使近藤眞
鋤ニ委任シ朝鮮政府ハ督辦交涉通商事務閣種默ニ委任シ各委命ヲ奉シテ會議定立ス
ル各條左ノ如シ

第一條 兩國議定地方ノ海濱三里日本國海里ノ算測ニ據ル已下之ニ準ス以內ニ於テ漁業ヲ營マントスル兩
國漁船ハ其船ノ間數所有主ノ住所姓名及乘組人員ヲ詳記シ其船主若クハ代理人ヨ
リ願書ヲ認メ日本漁船ハ其領事官ヲ經テ開港場地方應ヘ朝鮮漁船ハ議定地方ノ郡
區役所ニ差出シ該船ノ檢査ヲ經テ免許證札ヲ受クヘシ

但シ免許鑑札ハ漁業ノ時必ラス携帯スヘシ

第二條 漁業免許ノ鑑札ヲ受ケル者ハ漁業税トシテ左ノ割合ニ照シ税金ヲ納ムヘシ
而シテ此鑑札ハ之ヲ受ケタル日ヨリ滿一年間其効チ有スルモノトス

乗組人 十名已上 日本銀貨拾圓
同 五名已上 同 伍圓
同 九名已下 同 參圓
同 四名已下 同 參圓

第三條 漁業免許ノ鑑札ヲ受ケタル此國漁船ハ其捕獲シタル魚介ヲ彼國海濱ノ地方ニ於テ販賣スルコトヲ得ヘシト雖モ彼國政府ニ於テ衛生上又ハ其他ノ事故ニ由リ一般ニ販賣ヲ禁シタル魚介類ハ之ヲ販賣スルコトヲ許サス

第四條 兩國ノ漁船ハ漁業免許ノ鑑札ヲ受ケタルモノト雖モ特許ヲ得ルニアラサレハ兩國海濱三里以内ニ於テ鯨鯨ヲ捕獲スルコトヲ許サス

第五條 此國ノ漁船彼國海濱三里以内ニ於テ地方ノ禁制ニ背キ魚介其他海産ノ蕃殖ヲ害スヘキ方法ヲ用ユルコト勿ル可ク又ハ各地方ニ於テ魚介ノ種類ヲ限リ其捕獲ヲ禁制シタル時期ニ方リテハ彼是ノ漁民決シテ該魚介ヲ捕獲スルコト勿ル可シ

第六條 兩國地方官署ノ官吏ハ此規則ヲ執行スル爲メ必要ナリト認ムルトキハ該地方海濱三里以内ニ在ル彼國漁船内ヲ査檢シ若シ違犯者アレハ之ヲ押留スルコトヲ

得但シ朝鮮地方官ニテ日本船ヲ押留シタルトキハ其趣速カニ最寄日本領事官ニ通知シ該規則ニ從テ處分ヲ求ムヘシ

第七條 漁業免許ノ鑑札ヲ受ケスシテ海濱三里以内ニ於テ魚介ヲ捕獲シ若クハ捕獲セントシタル漁船ハ五圓已上拾五圓以下ノ罰金ニ處シ其捕獲物ヲ沒收ス

第八條 第一條免許鑑札ヲ携帯セサルモノ第四條ヲ犯スモノ及ヒ第六條地方官吏ノ査檢ヲ拒ムモノハ壹圓已上貳圓已下ノ罰金ニ處ス但シ第四條ヲ犯シタル者ハ別ニ捕獲シタル鯨鯨ヲ沒收ス

第一條乗組人員ヲ偽リ税金ヲ不足納シタル者ハ其不足高二倍ノ罰金ニ處ス

第三條禁制ノ魚介ヲ販賣シ及第五條魚介海産ノ蕃殖ヲ害スルノ方法ヲ用ヒ若クハ禁制ノ魚介ヲ捕獲シタルモノハ日本海濱ニ於テハ地方規則ニ照シテ處分シ朝鮮海濱ニ於テハ壹圓已上貳圓已下ノ罰金ニ處シ其捕獲物ヲ沒收ス

第九條 漁業鑑札ヲ他人ニ貸附シ海濱三里以内ニ於テ魚介ヲ捕獲セシメタルモノハ貸者借者共ニ該鑑札ニ相當スル税額ニ倍ノ罰金ニ處シ其捕獲物ヲ沒收ス

第十條 兩國議定地方ニアラサル海濱三里以内ニ於テ魚介ヲ捕獲シタルモノハ漁船漁具及其捕獲物ヲ沒收ス

第十一條 此規則ニ據テ處分スヘキ者ハ日本國海濱ニ於テハ日本地方裁判所ノ裁斷

ニ歸シ朝鮮國海濱ニ於テハ其地方官ヨリ最寄日本領事官ニ告訴シ其裁斷ニ歸スヘシ

第十二條 此規則實行ノ後更ニ増減スヘキ事項出來スルトキハ雙方協議改正スルヲ得漁業稅ニ至テハ此規則調印ノ日ヨリ二年間施行ノ後漁利ノ有無ヲ看テ再ヒ改正スヘシ

茲ニ雙方記名調印シ右確實ナルヲ證スル者也

大日本國明治二十二年十一月十二日

代理公使 近藤真鋤 印

大朝鮮國開國四百九十八年十月二十日

督辦交涉通商事務閣權 印

●清國及朝鮮國在留日本人取締規則

明治十六年三月 布告第九號

清國及朝鮮國在留日本人取締規則左ノ通制定ス

第一條 清國及朝鮮國駐劄ノ領事ハ在留ノ日本人該地方ノ安寧ヲ妨害セントシ若クハ風俗ヲ壞亂セントスル者又ハ其行爲ニヨリ該地方ノ安寧ヲ妨害シ若クハ風俗ヲ壞亂スルニ至ルヘキ者ト認定スル時ハ一年以上三年以下在留スルコトヲ禁止スヘシ

●明治十八年布告第二十六號ヲ以テ第一條ヲ改正セラ

シ但其情狀ニ由リテハ其期限間相當ノ保證金ヲ出サシメ在留セシムルコトヲ得

第二條 在留ヲ禁止セラレタル者ハ十五日以内ニ退去スヘシ若シ期限内退去シ難キ

正當ノ事由アリテ其旨ヲ申立ル時ハ領事ハ相當ノ猶豫期限ヲ與フルコトヲ得

第三條 保證金ヲ出シタル者再ヒ第一條ノ舉動アリト認定スル時ハ領事ハ其保證金

ヲ沒収シ仍ホ在留ヲ禁止スヘシ

第四條 退去期限若クハ猶豫期限内ニ退去セサル者及禁止期限ヲ犯シタル者ハ十一

日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ貳圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五條 此規則ノ處分ニ對シテハ上訴ヲ許サス

右奉 勅旨布告候事

●水液脂肪見本交換ニ係ル規則

明治十九年十二月 遞信省告示第十五號

水液脂肪類ノ見本ハ郵便局ノ點檢ヲ受ケ信書稅ヲ納ムルニ於テハ左ノ規則ニ據リ左記ノ各國ト交換スルヲ得ヘシ

- 一 水液體及溶解シ易キ脂肪品ハ密封セル玻璃壺内ニ盛り各壺子ハ木函ニ納レ鋸屑綿若クハ海綿質ノ物品ヲ十分ニ用テ其間隙ヲ填充シ以テ壺子破損ノ際水液ヲ吸收セシムルノ手當ヲナシタル後更ニ之ヲ金屬製ノ容器ニ納ムヘシ

●水液脂肪類見本交換ニ係ル規則中改正

明治二十二年 遞信省告示第二十五號

明治十九年(十二月) 遞信省告示第十五號

見本ノ四文字ニ改

●水液脂肪類
 見本ヲ交換シ
 加得ル國名中追
 明治二十年二
 月
 透信省告示第
 十四號
 明治十九年第十
 五號告示水液脂肪
 類見本ヲ交換シ得
 ル國名中ハイチチ
 加得ル國名中追
 見本ヲ交換シ
 ●水液脂肪類
 加得ル國名中追
 明治二十年二
 月
 透信省告示第
 十四號
 明治十九年第十
 五號告示水液脂肪
 類見本ヲ交換シ得
 ル國名中ハイチチ
 加得ル國名中追
 見本ヲ交換シ

- 二 樹脂膏藥軟質石鹼等ノ如キ容易ニ溶解セサル脂肪品ハ木函麻袋若クハ厚紙ノ袋ニ入レ更ニ之ヲ木函若クハ金屬製ノ容器ニ納ムヘシ
 - 三 乾燥ノ繪具類ハ紙函ニ入レ更ニ之ヲ麻袋若クハ厚紙ノ袋ニ納ムヘシ
 - 四 燃燒物爆發物ノ如キ危險ノ物品及惡臭ヲ發スル物品ハ其包装袋ノ如何ニ拘ラス一切郵送スルヲ許サス
 - 五 此見本ハ萬國郵便聯合條約ニ制定セル重量寸尺ニ超過スルヲ許サス
 - 六 此見本ハ市價ヲ有セサル少量ノモノニテ検査シ易キ樣封裝スルモノニ限ルヘシ
- 水液脂肪類見本ヲ交換スルヲ得ル國名
- | | | | | |
|-----------------------------------|-------|---------|----------|-----|
| 日耳曼 | 智利 | 亞然的音共和國 | 澳地利 | 洪葛利 |
| 白耳義 | 西班牙 | 伊太利 | 佛蘭西及其殖民地 | 那威 |
| 埃及 | 英領東印度 | 蘭領東印度 | 薩丁尼亞 | 葡萄牙 |
| 和蘭 | 羅馬尼亞 | 土耳其 | 瑞典 | 瑞西 |
| 右各國ノ内日耳曼ハ水液體ノ見本ノミヲ交換シ白耳義ハ繪具類ノ封袋ニ最 | | | | |

出ス脂肪品ニ限リ
 溶解ノ難易ニ係ル
 ラスニ準テ第一項ハ
 規定ニ據リ之ヲ包
 裝スヘシ

モ注意ヲ要シ埃及ハ脂肪品ト雖モ水液體ト同様ノ封裝ヲ要ス

●日英兩國船舶難破救助費用償還方

明治十二年三月
 內務省達乙第十五號

府 縣

明治十年七月乙第六十八號ヲ以テ英國難破船救助費支出方ノ儀相達置候處今般日英兩國船舶難破救助費償還方ノ儀ニ付別紙之通約定書交換相成候條此旨相達候事

(別紙)

日本政府ニ於テ英國破船人救助ノ爲メ衣類食料旅費或ハ溺流入骸ノ救援或ハ病者負傷者ノ治療其外死去人ノ埋葬ニ係ル諸入費ハ英國政府ヨリ日本政府ヘ償還スヘシ英國政府日本破船人ヲ救助スル時ハ日本政府ニテ右同様ノ手續タルヘシ日本政府又ハ英國政府ハ何レモ破船又ハ船内物貨ノ回復或ハ其保護ニ係ル費用ハ之ヲ償還スルノ責ニ任セサルヘシ總テ斯ノ如キ費用ハ難ヲ免レタル貨物ヲ以テ右貨物ヲ受取ル節右關係ノ者ヨリ其費用ヲ償却スヘシ日本政府又ハ英國政府ハ難船ノ場所ニ出張スル政府ノ官吏警察吏又ハ地方官ノ費用即チ難船人護送ノ官吏ノ旅費及ヒ公信往復費ヲ拂ハサルヘシ是等ノ費用ハ右官吏警察吏及ヒ地方官所屬ノ政府ニ歸スヘキ者トス

●日米兩國難破船舶費用償還方

明治十四年九月
內務省達乙第四十五號

府縣

難破船舶費用償還方ノ儀別紙之通米利堅合衆國政府ト結約批准相成候條此旨相達候事

(別紙)

日本帝國ト米利堅合衆國ト俱ニ約ヲ締ヒ以テ此國ノ船彼國ノ海岸ニ於テ難破ノ際ニ當リテ支出スヘキ一定ノ費用償還ノ法ヲ設ケン事ヲ欲シ仍テ之カ爲メニ特約ヲ結フコトニ決意シ其全權委員トシテ日本國

皇帝陛下ハ外務卿正四位勳一等井上馨ヲ之ニ任シ米利堅合衆國

大統領ハ閣下ニ駐劄セル合衆國特命全權公使シヨン、エー、ビンナムヲ之ニ任シ互ニ

其委任狀ヲ相示シ其式ノ善良適切ナルヲ認メテ訂約スルコト左列ノ如シ

凡ソ風波ノ難ニ罹レル日本ノ窮民ヲ救ヒ之ニ衣食シ之ニ旅費ヲ給シ若クハ溺者ノ遺骸ヲ收得シ病者傷者ノ醫料ヲ償フノ力ナキハ之ニ醫藥ノ資ヲ給シ若クハ死者埋葬等ノ爲メ合衆國政府ニ於テ支出シタル諸費ハ宜シク日本政府ヨリ之ヲ償還スヘシ又合衆國市民ノ難破ニ遭邁シ日本政府ヨリ扶助ヲ受クル者アル時ニハ合衆國政府宜シク

上下同様ノ手續ニ遵フヘシ然レトモ日本政府ニ於テモ將タ合衆國政府ニ於テモ難破船乃至其船中ノ貨財ヲ收回保存スルニ方リテ支出シタル費用ニ至テハ之ヲ償還スルノ責任ナカルヘシ凡テ這樣ノ費用ハ其拾得シタル貨財ニ課シコレニ關係アル輩ヲシテ該貨財引取ノ上償還セシムル者トス

日本政府ニ於テモ將タ合衆國政府ニ於テモ其難破ノ地ニ出張セシムル政府ノ官吏警察吏或ハ地方吏ノ手當又ハ難民ヲ護送スル吏員ノ旅費若クハ公信往復ノ費用ハ之ヲ取立サルヘシ此類ノ費用ハ右官吏警察吏地方吏所屬ノ國ノ政府ニ於テ負擔スルモノトス

此約書ハ正當ノ法式ニ從ヒ各自政府ニ於テ之ヲ批准シ其批准ハ可成速ニ之ヲ華盛頓府ニ於テ交換シ右交換後三十日ヲ越ヘ之ヲ各自ノ國中ニ實施スル者トス

此約書ハ日本文及英文各二本ヲ作り右ノ證據トシテ茲ニ兩國ノ全權委員各其名ヲ記シ印ヲ鈐ス

東京ニ於テ

明治十三年五月十七日

西曆千八百八十年五月十七日

井 上 馨

シヨン、エー、ビンナム印

●布哇國政府ト締結セル渡航條約

明治十九年六月三十一日
勅令無號

朕本邦人民布哇國へ隨意渡航ノ件ニ關シ同國政府ト締結シタル渡航條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

渡航條約

日本皇帝陛下ノ臣民ニシテ既ニ布哇諸島へ渡航シタル者數多アリ又本條約ヲ以テ確認セントスル從前ノ隨意渡航方法ニ因リ向後渡航セントスル者アルヘク又日本皇帝陛下及布哇國皇帝陛下ハ右渡航人へ布哇國ノ憲法法律ニ遵ヒ最モ完全且有効ノ保護ヲ與ヘントノ希望アルヲ以テ右重要ノ事件ニ付條約ヲ締結センコトヲ決定セリ因テ渡航條約ヲ協議締結セシメンカ爲メ日本皇帝陛下ハ外務大臣從三位勳一等伯爵井上馨ヲ其全權委員ニ又布哇皇帝陛下ハ其代理公使兼總領事ナイト、コンマンドル、チフ、カラカハ勳章「ロベルト、ウナルカー、アルウサン」ヲ其全權委員ニ命シ雙方互ニ委任ノ書ヲ示シ其誠實適當ナルヲ認メ以テ左ノ條々ヲ合議決定セリ

第一條 本條約ノ條款中既ニ布哇諸島へ渡航シタル日本皇帝陛下ノ臣民へ適用シ得ヘキモノハ向後渡航セントスル臣民同様ニ之ヲ適用スヘキコトヲ雙方互ニ結約セリ

第二條 本條約ノ効力ヲ存スル間其條款ニ因リ日本皇帝陛下ノ政府ハ其臣民ノ隨意ニ布哇島へ渡航スルヲ許可スヘシト雖モ其國家ノ緊急若クハ臣民ノ安寧如何ニ因

リ必要ト認ムルトキハ右渡航ノ都度之ヲ禁止シ又日本政府ノ獨斷ヲ以テ右渡航ヲ一般ニ制限停止シ若クハ禁止スルコトアルヘシ但日本皇帝陛下ノ政府ハ此權利ヲ猥リニ執行スヘカラス又本條約第三條ノ許可ヲ受ケ將ニ渡航セントスル者ニ對シテハ之ヲ施行セサルヘシ

第三條 本條約ヲ以テ取極タル渡航ハ橫濱及ヒ「ホノルル」ノ兩港間ニ限り之ヲ行フヘク而シテ神奈川縣令ハ日本政府ノ名義ヲ以テ右ニ關スル諸般ノ事項ヲ處分スヘシ又布哇皇帝陛下ノ政府ニ於テハ其移住民事務局ノ特派委員ヲ任命シ之ヲ橫濱ニ在留セシムヘシ但右委員ノ任命ハ日本政府ノ認可ヲ經ヘキモノトス

右委員ハ布哇諸島へ渡航スヘキ日本臣民ニ關スル諸般ノ事項ニ付神奈川縣令ト通信協議スヘク加之右渡航人ヲ搭載運送スルニ必要ノ處分ハ總テ之ヲ施行スヘシ又若シ渡航人ヲ要スルトキハ右委員ハ其都度少クモ一箇月前其旨ヲ右縣令へ通知シ其人員及ヒ其職業ノ種類ヲ申出ツヘク而シテ右縣令ハ其通知ニ對シ猶豫ナク日本政府ノ諾否如何ヲ回答スヘシ但右通知ヲ缺クカ又ハ右縣令ヨリ其請求ヲ承諾スルノ回答ナキニ於テハ前條末項ヲ適用セサルモノトス

第四條 本條約ヲ以テ取極タル渡航ハ總テ契約ニ因ルヘク又其契約ハ何年間以下ナク期限トシ兩國政府ノ認可シタル式ニ從フヘシ

右契約ハ布哇政府ノ名義ヲ以テ其移住民事務局特派委員横濱ニ於テ渡航人ト締結スヘシ而シテ神奈川縣令ノ認可ヲ經ヘシ

右契約繼續中布哇政府ハ渡航人ニ對シ備主ノ義務ヲ負擔スヘキヲ以テ其諸條款ヲ正當誠實ニ履行スルノ責ニ任スヘク而シテ同政府ハ其法律ニ因リ渡航者タル日本人ヲ充分ニ保護シ且時勢ノ如何ニ係ハラス常ニ渡航人ノ幸福安寧ヲ計ルヘシ

第五條 布哇皇帝陛下ノ政府ハ本條約ニ因リ渡航スル者ヲ上等ノ乘客汽船ニ搭載シ之ニ相當ノ食物ヲ給與シ下等船客トナシ横濱ヨリ「ホノルル」マテ無賃ニテ渡航セシムヘシ但右渡航人ノ迴送ニ供スル汽船ハ神奈川縣令ノ至當ト證ムルモノニ限ルヘシ

第六條 布哇國移住民事務局ト渡航者タル日本人ト締結シタル契約ノ條款ヲ相當ニ履行センカ爲メ及ヒ布哇國ノ法律ニ因リ右渡航人ノ權利ヲ充分ニ保護センカ爲メ布哇皇帝陛下ノ政府ハ右契約繼續中日本語及ヒ英語ヲ談話通辯シ得ル監督人及ヒ通辯人ヲ應分ニ雇入ルヘク而シテ右契約ノ事件ニ付右渡航人原告、被告、告訴人若クハ被告訴人ト成リ布哇國法廳ニ出訴スルトキハ布哇國政府ハ右通辯人ヲシテ右渡航人ヨリ別ニ謝金ヲ要セス其職ヲ勤メシムヘシ

第七條 布哇皇帝陛下ノ政府ハ本條約ニ因リ締結シタル契約ノ繼續中渡航人ヲ治療

セシメンカ爲メ日本醫師ヲ應分ニ傭入レ之ニ官醫ノ資格ヲ與ヘ又之ヲシテ渡航人ノ治療ニ時々必要ト成ルヘキ地方ニ住居セシムヘシ

第八條 布哇皇帝陛下ノ政府ハ在布哇日本外交官及其領事ヲシテ何時アリトモ故障ナク自由ニ渡航者タル日本人ト接近スルヲ得セシムヘシ而シテ右外交官及領事官ハ契約ノ誠實ニ履行セラル、ヤ否ヤヲ視察スルニ充分ノ便利ヲ得ルト其契約違背ノ場合ニ於テハ布哇國ノ法律及其地方廳ノ保護ヲ請求シ得ルトノ權利アルヘシ

第九條 布哇國ニ渡航スル日本臣民ノ安寧幸福及ヒ繁榮ハ兩政府ノ等シク希望スル所タリ故ニ不良不善無賴ノ日本人布哇國ニ到リ渡航人ノ中ニ紛議騷擾ヲ醸シ又ハ之ヲ放蕩ニ誘引シ若クハ布哇政府ノ負擔トナルヘキモノハ同政府ニ於テ之ヲ日本ヘ送還スルハ日本政府ノ承諾スル所ナリ

第十條 本條約ハ批准ヲ經ヘク而シテ其批准書ハ成ルヘク速ニ「ホノルル」府ニ於テ交換スヘシ

第十一條 本條約ハ批准交換ノ日ヨリ直ニ執行シ五年間有効ノモノタルヘシ而シテ其後ト雖モ此條約國ノ一方ニ於テ六箇月前ノ通知ヲ以テ之ヲ廢止セントスルノ意ヲ表スルニ非サレハ尙ホ其効力ヲ存スルモノトス
右證據トシテ雙方ノ全權委員和文及ヒ英文ヲ以テ本條約ヲ調製シ茲ニ記名調印スル

モノナリ

明治十九年一月二十八日西曆千八百八十六年一月二十八日於東京

井 上 馨

アールダグリュール、アーウフン

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝御名明治十九年即チ西曆一千八百八十六年一月二十八日東京ニ於テ日本國人民布哇國へ隨意出稼ノ件雙方全權委員ノ記名シタル條約書ヲ朕親ヲ閱覽點檢セシニ能ク朕カ意ニ適シ聞然スル所ナキヲ以テ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百四十六年明治十九年一月二十九日東京帝宮ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

●瑞西國外十一箇國間ニ締結セル赤十字條約

明治十九年十一月十五日
勅令無號

朕西曆千八百六十四年戰時負傷者ノ不幸ヲ救濟スル爲メ瑞西國外十一國ノ間ニ締結セル赤十字條約ニ加入シ茲ニ之ヲ公布セシム

西曆千八百六十四年八月二十二日瑞西國ヂュネーヴ府ニ於テ瑞西國外十一國ノ

間ニ締結セル赤十字條約加盟書

日本皇帝陛下ハ軍隊出陣負傷者ノ狀態改良ノ件ニ關シ千八百六十四年八月二十二日ヂュネーヴニ於テ瑞西聯邦バード大公殿下白耳義皇帝陛下丁抹皇帝陛下西班牙皇帝陛下佛蘭西皇帝陛下ヘッス大公殿下伊太利皇帝陛下和蘭皇帝陛下葡萄牙及アルガルブ皇帝陛下普魯士皇帝陛下ヴュルタンベル皇帝陛下ノ間ニ締結セシ左ノ條約ヲ識認ス

第一條 戰地假病院及ヒ陸軍病院ハ局外中立ト見做シ患者若クハ負傷者ノ該病院ニ在院ノ間ハ交戰者之ヲ保護シテ侵スコト勿ルヘシ

但戰地假病院及ヒ陸軍病院ハ兵力ヲ以テ之ヲ守ル時ハ其局外中立タルノ資格ヲ失フモノトス

第二條 戰地假病院及ヒ陸軍病院ニ於テ任用スル人員即チ監督員、醫員、事務員、負傷者運搬員并ニ說教者ハ各其本務ニ從事シ且ツ負傷者ノ入院スヘク若クハ救助スヘキ者アル間ハ局外中立ノ利益ヲ享有スルモノトス

第三條 前條ニ掲ケタル各員ノ從事スル戰地假病院若クハ陸軍病院ハ敵軍ノ占領ニ係ルト雖モ各員ハ依然其本務ヲ行フコトヲ得ヘク若クハ其屬スル隊ニ再ヒ加ハル爲メ退去スルコトヲ得ヘシ

前項ノ場合ニ於テ各員其職ヲ罷ル時ハ占領軍隊ヨリ敵軍ノ前哨ニ之ヲ送致スヘシ
 第四條 陸軍病院ノ器具什物等ハ交戰條規ニ從テ處置スヘキモノナリ故ニ該病院附
 屬ノ各員ハ其退去ノ際各自ノ私有品ヲ除クノ外爾餘ノ物品ヲ攜帶スルコトヲ得ス
 但戰地假病院ハ前項ノ場合ニ於テモ其器具什物等ヲ保有スルコトヲ得

第五條 負傷者ヲ救助スル土地ノ住民ハ侵スコトヲ得ス且ツ之ヲシテ其自由ヲ得セ
 シメサルヘカラス

交戰國ノ將官ハ住民ニ慈善ノ舉ヲ德憑シ且ツ慈善ノ舉ニ依テ局外中立タルノ資格
 ナ有スルコトヲ得ヘキ旨ヲ豫告スルノ責アルモノトス

家屋内ニ負傷者ヲ接受シ之ヲ看護スル時ハ其家屋ヲ侵スコトヲ得ス又自己ノ家屋
 ニ負傷者ヲ接受スル者ハ戰時課税ノ一部ヲ免カレ且ツ其家屋ヲ軍隊ノ宿舍ニ供用
 スルコトヲ免カルヘシ

第六條 負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル軍人ハ何國ノ屬籍タルヲ論セス之ヲ接受シ看護
 スヘシ司令長官ハ戰鬪中ニ負傷シタル兵士ヲ速ニ敵軍ノ前哨ニ送致スルコトヲ得
 但右ハ其時ノ狀勢ニ於テ之ヲ送致スルコトヲ得ヘク且ツ兩軍ノ協議ヲ經タル場合
 ニ限ルモノトス

治療後兵役ニ堪ヘスト認メタル者ハ其本國ニ送還スヘシ

又其他ノ者ト雖モ戰爭中再ヒ兵器ヲ帶ヒサル旨盟約シタル者ハ其本國ニ送還スヘ
 シ
 患者負傷者退去スル時ハ其之ヲ率フル人員ト共ニ完全ナル局外中立ノ取扱ヲ受ク
 ヘシ

第七條 陸軍病院戰地假病院并ニ患者負傷者退去ノ標章トシテ特定一様ノ旗章ヲ用
 ヒ且ツ其傍ニ必ス國旗ヲ掲クヘシ

局外中立タル人員ノ爲ニ臂章ヲ裝附スルコトヲ許ス但其交付方ハ陸軍官衙ニ於テ
 之ヲ司トルヘシ旗及ヒ臂章ハ白地ニ赤十字形ヲ畫ケルモノナルヘシ

第八條 此條約ノ實施ニ關スル細目ハ交戰軍ノ司令長官ニ於テ其本國政府ノ訓令ニ
 從ヒ且ツ此條約ニ明示シタル綱領ニ準據シテ之ヲ規定スヘシ

第九條 此締盟各國ハザニテ一ツ會議ニ全權委員ヲ派遣セザリシ政府ニ此條約ヲ示
 シ其加盟ヲ請フコトヲ約諾セリ因テ之カ爲メ議事録中餘白ヲ存ス

第十條 此條約ハ批准ヲ受クヘキモノトス而シテ其批准書ハヘルヌニ於テ四月以内
 若クハ可成ハ其以前ニ交換スヘシ

是ニ於テ下名瑞西聯邦駐劄日本皇帝陛下ノ特命全權公使ハ本件ニ關シ特別ノ權限ヲ
 帶ヒ此書ヲ以テ日本帝國ノ本條約ニ加盟スルコトヲ告知ス

右確證ノ爲メ下名ハ千八百八十六年六月五日ヘルヌ府ニ於テ此告知書ニ記名調印スルモノナリ

瑞西聯邦駐劄日本特命全權公使侯爵蜂須賀茂韶手書

●澳地利外六國間ニ締結セル海上法要義ニ關スル宣言

明治二十年三月十四日 勅令無號

朕西曆千八百五十六年四月十六日巴里公會ニ於テ澳地利、佛蘭西、大不列顛、普魯西、露西亞サルザニア、及土耳其ノ間ニ締結セル海上法要義ニ關スル宣言ニ加盟シ茲ニ之ヲ公布セシム

海上法ノ要義ヲ確定スル爲メ西曆千八百五十六年四月十六日巴里公會ニ於テ決定セシ宣言

千八百五十六年三月三十日巴里條約ニ署名セル各全權委員ハ茲ニ會議ヲ開キ戰時海上法ノ古來久シク痛嘆スヘキ紛議ノ原因ト爲リ且本件ニ關スル法律及ヒ義務ノ明確ナラサルハ局外中立國ト交戰國トノ間意見ノ相合ハサルノ基ニシテ隨テ容易ナラサル困難或ハ葛藤ヲ惹起スルノ恐レアルヲ悟リ此緊要ナル事項ニ關シ一定ノ主義ヲ設クルノ利益アル事並ニ巴里公會ニ參集セル各全權委員ニ於テ本件ニ關スル列國交

際上一定ノ原則ヲ議定スルハ最モ能ク各自政府ノ希圖ニ應スルモノナル事ヲ認メリ因テ右全權委員ハ各其政府ヨリ妥當ノ委任ヲ受ケ此目的ヲ達スルノ方法ヲ協議センコトニ決シ評議ノ上左ノ宣言ヲ採用セリ

- 第一 私船ヲ拿捕ノ用ニ供スルハ自今之ヲ廢止スル事
- 第二 局外中立國ノ旗章ヲ掲クル船舶ニ搭載セル敵國ノ貨物ハ戰時禁制品ヲ除クノ外之ヲ拿獲スヘカラサル事
- 第三 敵國ノ旗章ヲ掲クル船舶ニ搭載セル局外中立國ノ貨物ハ戰時禁制品ヲ除クノ外之ヲ拿獲スヘカラサル事
- 第四 港口ノ封鎖ヲ有効ナラシムルニハ實力ヲ用キサルヘカラス即チ敵國ノ海岸ニ接到スルヲ實際防止スルニ足ルヘキ充分ノ兵備ヲ要スル事

●帝國ト暹羅國トノ間ニ締結セル修好通商ニ關スル宣言

明治二十一年一月二十七日 勅令無號

朕帝國ト暹羅國トノ間ニ締結シタル修好通商ニ關スル宣言ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム
日本皇帝陛下及暹羅皇帝陛下ハ嘗テ兩國間ニ存在セシ友誼親睦ノ關係ヲ再起シ且ツ

將來締結スヘキ條約ノ基礎ヲ定メシコトヲ欲シ日本皇帝陛下ハ外務次官從三位勳二等李滬西赤鷲大綬章李滬西王冠大綬章、和蘭ライオン大綬章子爵青木周藏ヲ全權委員ニ命ジ暹羅皇帝陛下ハ外務大臣ゼーモースト、セークレツド、エンド、エンツエント、オルドル、オフ、ゼー、ナイン、ゼムス及ゼー、モースト、イラストリヤス、オルドル、オフ、ゼー、ハウス、オフ、チャクルクリイ、ノ、ナイト、チユラ、チヨムクラオ大綬章ホワイト、エレフアント大綬章暹羅王冠大綬章デヴァウングセ親王ヲ其全權委員ニ命ジ雙方互ニ其委任狀ヲ示シ其正實適當ナルヲ確認シ左ノ宣言ヲ爲スコトニ議定セリ

宣言

此宣言批准ノ日ヨリ以後兩締約國間並ニ其臣民間ニ永遠無窮ノ平和親睦アルヘシ兩締約國ハ互ニ其朝廷ニ外交官ヲ派遣シ又最惠國領事ノ駐在シ得ヘキ各海港市府ニ總領事、領事若クハ領事事務官ヲ置クノ權利ヲ承認ス兩締約國ハ可成的兩國間並ニ其臣民間ノ通商及航海ヲ獎勵シ且ツ之ニ便宜ヲ得セシムルコトヲ約ス

完全ナル條約締結ニ至ル前ニ兩締約國ノ一方ノ臣民通商又ハ他ノ正當ナル目的ヲ以テ他ノ一方ノ領地ニシテ最惠國ノ臣民ニ通商ヲ許ス場所ニ來ル時ハ身體財產ノ保護

及公平無私ノ待遇ヲ受クヘシ

前陳ノ事件ニ關スル詳細ノ事項ハ兩國間將來ノ條約ヲ以テ之ヲ規定スヘシ此宣言ハ成ル可ク速ニ遲クモ調印ノ日ヨリ四箇月以内ニ批准シ東京ニ於テ其批准書ヲ交換スヘシ右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ此宣言書ニ記名調印スル者也

明治二十年九月二十六日即チ陰曆クン年アサユヤマノ月九日暹羅曆紀元千二百四十九旬九日西曆千八百八十七年九月二十六日

青 木 周 藏

デヴァウングセ

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス帝國及ヒ暹羅國ノ間ニ嘗テ存在セシ友誼親睦ノ關係ヲ再起シ且ツ將來締結スヘキ條約ノ基礎ヲ定メシコトヲ欲シ明治二十年九月二十六日東京ニ於テ帝國及ヒ暹羅國兩全權委員ノ記名調印シタル宣言文各條目ヲ朕親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右宣言ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百四十八年明治二十一年一月二十日東京帝宮ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

●帝國ト墨西哥合衆國トノ修好通商條約

明治二十二年七月十七日
勅令無號

朕明治二十一年十一月三十日北米合衆國華盛頓府ニ於テ朕カ全權委員ト墨西哥合衆國全權委員ヘ記名調印シタル修好通商條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

日本皇帝陛下及墨西哥合衆國大統領ハ兩國間並ニ其臣民及人民間ノ修好通商ニ關シ永久堅固ノ基礎ヲ定メシコトヲ欲シ修好通商條約ヲ締結スルコトニ決シ日本皇帝陛下ハ亞米利加合衆國華盛頓府ニ駐劄スル日本皇帝陛下ノ特命全權公使從四位勳三等陸奥宗光ヲ其全權委員ニ命シ墨西哥合衆國大統領ハ亞米利加合衆國華盛頓府ニ駐劄スル墨西哥合衆國ノ特命全權公使マナス、ロメロ、ヲ其全權委員ニ命シタリ因テ雙方ノ全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其正實適當ナルヲ確認シ左ノ條々ヲ合議決定セリ

第一條 日本帝國ト墨西哥合衆國トノ間並ニ兩國臣民及ヒ人民ノ間ニ永遠無窮ノ平和親睦アルヘシ

第二條 日本皇帝陛下ハ其便宜ニ從ヒ其外交官ヲ墨西哥合衆國ニ駐劄セシムルコトヲ得墨西哥合衆國政府モ亦其便宜ニ從ヒ其外交官ヲ日本國ニ駐劄セシムルコトヲ

得又兩締約國ハ各々通商上便宜ノ爲メ他ノ一方ノ領地ニ於テ最惠國領事官ノ駐在シ得ヘキ各港各所ニ總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ヲ駐在セシムルノ權ヲ有スヘシ然レトモ右總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ハ其職務ヲ行フニ先テ定式ニ從ヒ其赴任國政府ノ認可ヲ經ヘキモノトス而シテ兩締約國ノ一方ノ外交官及ヒ領事官ハ本條約ノ各條款ニ牴觸セサル外他ノ一方ノ領地内ニ於テ最惠國ノ同格ノ外交官及領事官ニ現ニ許與シ若クハ將來許與スヘキ一切ノ權利特權及ヒ免除ヲ享有スヘシ

第三條 兩締約國ノ領地及ヒ其所屬地ノ間ニハ相互ニ通商及ヒ航海ノ自由アルヘシ兩締約國ノ一方ノ臣民若クハ人民ハ他ノ一方ノ領地及ヒ其所屬地ニシテ最惠國ノ臣民若クハ人民ノ到リ得ヘキ各所各港ヘハ其船舶貨物ヲ以テ自由安全ニ到ルコトヲ得且ツ最惠國ノ臣民若クハ人民ノ滞在住居シ得ヘキ各所各港ニ滞在住居スルコトヲ得又右臣民若クハ人民ハ其住居地ニ在テ家屋倉庫ヲ借受ケ總テ正業ニ屬スル天產物、製造品及ヒ其他商品ノ卸賣若クハ小賣營業ニ從事スルコトヲ得

第四條 日本皇帝陛下ハ本條約前條ニ依リ日本國ニ渡來スル墨西哥國人民ニ附與シタル特權ノ外茲ニ此條約ニ記載セル數箇ノ條款ニ對シ別ニ同國人民ニ許與スルニ皇帝陛下ノ領地内及ヒ其所屬地各所ニ入來シ又ハ滞在住居シ同所ニ於テ家屋倉庫

ヲ借受ケ又ハ總テ正業ニ屬スル天產物、製造品及ヒ各種商品ノ卸賣若クハ小賣營業及ヒ其他一切合法ノ職業ニ從事スルノ特權ヲ以テス

第五條 兩締約國ハ其一方ノ領地ニ於テ通商航海旅行及ヒ住居ノ事ニ關シ他ノ外國ノ臣民若クハ人民ニ現ニ許與シ若クハ將來許與スヘキ一切ノ殊遇、特權及ヒ免除ハ他ノ一方ノ臣民若クハ人民ニモ之ヲ許與シ而シテ右殊遇、特權及ヒ免除ハ報酬ヲ要セスシテ他ノ外國ノ臣民若クハ人民ニ許與シタルモノニ係レハ又均シク報酬ヲ要セスシテ之ヲ許與シ若シ別段ノ約束ニ依テ許與シタル者ニ係レハ則チ同一ノ約束又ハ之ト同一ノ價值ヲ有スル報酬ニ對シテ之ヲ許與スヘキコトヲ約ス

第六條 噸稅、燈稅、港稅、水先案内費、難破救助費及ヒ其他ノ諸稅ニ就キテハ日本各港ニ於ケル墨西哥合衆國ノ船舶又墨西哥合衆國各港ニ於ケル日本國ノ船舶ニ對シ最惠國ノ船舶ニ現ニ賦課シ又ハ將來賦課スヘキ諸稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅金ヲ賦課スルコトナカルヘシ

第七條 墨西哥合衆國ノ天產物及ヒ製造品ヲ日本國ニ輸入シ又ハ日本國ノ天產物及ヒ製造品ヲ墨西哥合衆國ニ輸入スルトキハ他ノ外國ノ產出若クハ製造ニ係ル同種類ノ物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スヘキ輸入稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地若クハ所屬地ヨリ他ノ

一方ノ領地若クハ所屬地ヘ向ケ輸出スル物品ニ就テハ他ノ外國ヘ向ケ輸出スル同種類ノ物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スヘキ諸稅金ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地ノ天產物若クハ製造品ヲ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ニ輸入スルヲ禁スルハ他ノ外國ノ產出若クハ製造ニ係ル同種類ノ物品ノ輸入ヲ禁スル場合ニ限ルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地ヨリ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ヘ向ケ物品ヲ輸出スルヲ禁スルハ他ノ外國ノ領地ヘ向ケ同種類ノ物品ノ輸出ヲ禁スル場合ニ限ルヘシ

第八條 日本國又ハ其領海ニ來ル墨西哥合衆國ノ人民及ヒ船舶ハ日本國又ハ其領海ニ在ル間ハ墨西哥合衆國及ヒ其領海ニ到ル日本皇帝陛下ノ臣民及ヒ船舶カ墨西哥國ノ法律及ヒ其裁判管轄ニ服従スルト同様日本國ノ法律ヲ遵奉シ且ツ其裁判管轄ニ服従スヘキモノトス

第九條 本條約ハ其批准書交換後直ニ實行スヘシ而シテ兩締約國ノ一方ヨリ本條約ヲ廢棄スルノ意ヲ他ノ一方ヘ通知シタル日ヨリ六箇月間其効力ヲ有シ此期限ヲ經過シタル上ハ直ニ其効力ヲ失フヘシ

第十條 本條約ハ日本文、西班牙文及ヒ英文ノ三國文ニ記スヘシ若シ日本文ト西班牙文トノ間ニ文意相異ナルトキハ英文ニ從リ之ヲ斷定スヘキコトヲ雙方政府約束

第十一條 本條約ハ可成丈ケ早キ時期ニ兩締約國ニ於テ互ニ批准シ亞米利加合衆國
 華盛頓府ニ於テ其批准書ヲ交換スヘシ
 右證據トシテ雙方ノ全權委員本條約六通ニ記名調印スルモノ也

日本明治二十一年十一月三十日
 西曆千八百八十八年十一月三十日

華盛頓府ニ於テ

陸 奧 宗 光 印
 エム、ロメロ 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝阼ヲ踐ミタル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス
 帝國ト墨西哥合衆國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメンコトヲ欲シ明治二十一年十一月
 三十日北米合衆國華盛頓府ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル修好通商條約文ノ
 各條目ヲ朕親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約
 ナ嘉納批准ス
 神武天皇即位紀元二千五百四十九年明治二十二年一月二十九日東京宮城ニ於テ親ヲ
 名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

●帝國ト墨西哥合衆國トノ修好通商條約ニ依リ墨西哥
 合衆國人民ニ交付スヘキ國籍證明書規則

明治二十二年七月
 外務省令第三號

明治二十一年十一月三十日帝國ト墨西哥合衆國トノ間ニ締結シタル修好通商條約ニ
 依リ墨西哥合衆國人民カ帝國内ニ於テ享有スヘキ權利ヲ實行スルニ際シ其國籍ヲ證
 明スルニ便ナランカ爲メ茲ニ國籍證明書規則ヲ定ムルコト左ノ如ク

國籍證明書規則

- 第一條 墨西哥合衆國人民ハ本規則ノ手續ニ依リ地方廳ヲ經テ國籍證明書ノ交付ヲ
 外務省ニ出願スルコトヲ得
- 第二條 國籍證明書ヲ得ンコトヲ欲スル者ハ自ラ地方廳ニ出頭シ其國籍ノ證據トナ
 ルヘキ書類ヲ添ヘ國籍氏名年齢ヲ記シタル願書ヲ地方長官ニ差出スヘシ但シ本國
 領事ノ駐在スル地ニ在リテハ其願書ニ領事ノ裏書アルヲ要ス
- 第三條 出願人若シ國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ所持セサル時ハ其願書ニ記載シタ
 ル國籍ニ屬スルコトヲ書面ヲ以テ確言スヘシ
- 第四條 地方長官國籍證明書交付ノ願書ヲ受領シタル時ハ願書記載ノ事實ニ就キ取

調ヲ遂ケ意見ヲ具シテ其願書ヲ外務省ニ送致スヘシ

第五條 國籍證明書ハ外務省ヨリ地方廳ヲ經テ出願人ニ交付ス但シ之ニ對シ手数料ヲ要セス

○豫約諸君へ特別廣告

明治元年以降現ニ行ハル、所ノ法律規則ハ無數ニシテ其必要ト不必要トヲ問ハス細大洩サス悉皆之ヲ集輯セントスルモハ非常ノ大部トナリ啻ニ搜索ニ大ナル不便ヲ來タスノミナラス徒ラニ莫大ノ費用ヲ要シ到底企テ及フ可キノ業ニ非ラス依テ本書ハ現行ノ法規中ニテ常ニ官民ニ於テ必要アル可シト思料スルモノヲ參酌類輯スルトナシタルヲ以テ無數ノ法規或ハ多少ノ脱漏ヲ免カレズ幸ニ本書ハ抜き差自在ノ仕法ナルヲ以テ將來必要法規ノ脱漏ヲ發見スル毎ニ追加トシテ毎月刊行ノ法規綴中ニ差加ヘ御送付致シ漸々相補ヒ以テ數年ノ後ニ至テ完全無欠ノ書ト爲サンコトヲ期ス尤モ右追加ヲ差加ヘ候トモ代價ハ矢張一ヶ月金貳拾五錢ニテ別ニ増額ヲ請求セス然レモ右追加ノ分ヲ四綴ノ内ヘ追加スルトキハ書冊浩濶ニ涉リ閱讀ニ不便ヲ來タス可キニ付追加ノ分ヲ綴込ム可キ一綴ヲ増加シ都合五綴トナシ其追加ノ一綴ハ豫メ表紙ノミヲ御送付致置キ追加ノ法規ヲ漸次御送付スルニ從テ之ニ御綴込ヲ相願候フニ致度候得共此迄廣告ノ外ニ右追加用ノ表紙實費額金拾五錢ニ相成御迷惑ニモ可有之候間此表紙ニ限り別ニ御申込無之限リハ差出シ不申候將又凡例圖面中ニ有之候差込臺(實費上等金三拾錢下等金二拾錢)モ随分木板竹針ニテ差支無之候間是又別段御申込無之分ハ差出シ不申候若御入用之諸君ハ早々御一報可被下候但表紙差込臺及遞送費共前金ニテ御送付被下度此段豫メ御了承被下度奉願候也

追申毎月刊行法規綴ノ紙數ハ其月發布ニ係ル法律規則ノ多少ニ依リ多寡アルヲ以テ紙數ノ多キ月

モアリ又紙數ノ極メテ少キ月モアル可シ故ニ此代金チ一ヶ月金貳拾五錢ト定メタルハ數月ノ平均
ヲ取テ割合ヲ立テタルモノナレハ此段モ豫メ御了承アラソク乞フ

●本編ハ豫定ノ如ク臺本チ四綴ニ分ツト雖モ漸新定ノ法規綴込ニ至テ其浩濬ヲ厭ハル、者ハ之ヲ幾
干ニ分綴スルモ自在也其法タル各類ノ目次本文共紙丁ヲ區分シアルヲ以テ何レノ類ト雖モ意ノ如
ク分綴セラレサルモノナシ而テ其表紙ハ御申込ニ依リ一冊分代金拾五錢ヲ以テ幾冊ニテモ御需ニ
應スヘシ但金字記入ノ都合モ有之ニ付必第何綴ト御注文ヲ乞若此御記入ナキモノハ第五綴第六綴
ト順序ヲ逐テ記入スヘシ此段豫メ拜告ス

特別盟告

●本綴發行ノ主意アルヤ一時刊行ノ書籍ト異ナリ永久繼續ヲ以テ其目的トナシタルモノナレハ政府
カ法規ノ改廢ヲ止メサル限リハ本編モ亦廢絶スル事ナシ然ルニ往々本業ノ中止廢絶ヲ懸念セラレ
、豫約者ナキニアラス蓋創業ノ故ヲ以テ此疑ヲ懷カル、モ自然ノ人情ナラン然リト雖モ本社ハ其
内部ニ確乎不變ノ締約アツテ縱令編者中ニ如何ナル事故ヲ生スルモ之ニ代テ編輯印行ヲ擔任スヘ
キ確法ヲ設ケタレハ將來幾年月ヲ經過シ何等ノ時運ニ遭遇スルモ斷ニテ廢絶セズ此段豫メ購讀各
位ニ稟告ス

謝 告

本綴發行ノ當初總紙數六千余頁ノ豫算ヲ以テ非常廉價ノ豫約ヲ締結セシカ現行ノ法規意外ニ多ク
其必要ト認ムルモノノミヲ掲グルモ到底目的ヲ達スルヲ不得第四綴ニ至リ丁數豫想ノ外ニ出テ連
モ六千余ページヲ以テ完了スル不能依テ更ニ數百丁ヲ加ヘントスレトモ當初豫約ノ實價過廉經費
ノ支ヘ難キヲ奈何セン然レ共其緊要法規ヲ除却シ去ルハ編者ノ忍ヒサル處タルヲ以テ止ヲ得ス第
四綴中各類ニ屬スル最尾ノ若干丁ヲ割テ別ニ編輯シ本綴ニハ目次ノミヲ掲ケ置第一號第二號ノ改廢加除綴ヲ第三
第四號中ニ取纏メ第一號第二號及第五號ハ悉ク第四綴各類ノ追加トシテ發行セリ請フ其類名ト丁
數トヲ參照シテ第四綴各類ニ綴込マレンコト如此ハ万々止ヲ得サル事情ニ出グリト雖モ當初ノ目
的ニ齟齬シ甚恐縮ニ耐ヘス伏テ大方ノ各位ニ謝ス

モアリ又紙數ノ極メテ少キ月モアル可シ故ニ此代金チ一ヶ月金貳拾五錢ト定メタルハ數月ノ平均
ヲ取テ割合ヲ立テタルモノナレハ此段モ豫メ御了承アラソコナク

●本編ハ豫定ノ如ク臺本チ四綴ニ分ツト雖モ漸新定ノ法規綴込ニ至テ其浩濬ヲ厭ハル、者ハ之ヲ幾
干ニ分綴スルモ自在也其法タル各類ノ目次本文共紙丁ヲ區分シアルヲ以テ何レノ類ト雖モ意ノ如
ク分綴セラレサルモノナシ而テ其表紙ハ御申込ニ依リ一冊分代金拾五錢ヲ以テ幾冊ニテモ御需ニ
應スヘシ但金字記入ノ都合モ有之ニ付必第何綴ト御注文ヲ乞若此御記入ナキモノハ第五綴第六綴
ト順序ヲ逐テ記入スヘシ此段豫メ拜告ス

特別盟告

●本綴發行ノ主意ケルヤ一時刊行ノ書籍ト異ナリ永久繼續ヲ以テ其目的トナシタルモノナレハ政府
カ法規ノ改廢ヲ止メサル限リハ本編モ亦廢絶スル事ナシ然ルニ往々本業ノ中止廢絶ヲ懸念セラレ
豫約者ナキニアラス蓋創業ノ故ヲ以テ此疑ヲ懷カル、モ自然ノ人情ナラン然リト雖モ本社ハ其
内部ニ確乎不變ノ締約アツテ縱令編者中ニ如何ナル事故ヲ生スルモ之ニ代テ編輯印行ヲ擔任スヘ
キ確法ヲ設ケタルハ將來幾年月ヲ經過シ何等ノ時運ニ遭遇スルモ斷テ廢絶セズ此段豫メ購讀者
位ニ原告ス

謝 告

本綴發行ノ當初總紙數六千余頁ノ豫算ヲ以テ非常廉價ノ豫約ヲ締結セシカ現行ノ法規意外ニ多ク
其必要ト認ムルモノノミヲ掲グルモ到底目的ヲ達スルヲ不得第四綴ニ至リ丁數豫想ノ外ニ出テ逆
モ六千余ペーシヲ以テ完了スル不能依テ更ニ數百丁ヲ加ヘントスレトモ當初豫約ノ實價過廉經費
ノ支ヘ難キヲ奈何セン然レ共其緊要法規ヲ除却シ去ルハ編者ノ忍ヒサル處タルヲ以テ止ヲ得ス第
四綴中各類ニ屬スル最尾ノ若干丁ヲ割テ別ニ編輯シ本綴ニハ目次ノミヲ掲ケ置第一號第二號ノ改廢加除綴ヲ第三
第四號中ニ取纏メ第一號第二號及第五號ハ悉ク第四綴各類ノ追加トシテ發行セリ請フ其類名ト丁
數トヲ參照シテ第四綴各類ニ綴込マレンコト如此ハ万々止ヲ得サル事情ニ出タリト雖モ當初ノ目
的ニ齟齬シ甚恐縮ニ耐ヘス伏テ大方ノ各位ニ謝ス

明治二十四年六月廿三日印刷
明治二十四年六月廿七日出版

編纂者

林 陸 夫

愛知縣名古屋市富士塚町甲六十番戶寄留

全

木 澤 成 肅

東京市下谷區下谷西町壹番地

發行者

近 藤 英 一 郎

東京市京橋區彌左衛門町十五番地

全

池 田 謙 吉

愛知縣名古屋市長者町三丁目丁九十七番戶寄留

印刷者

稻 村 爲 胤

愛知縣名古屋市富士塚町甲六十番戶寄留

定價 價金六圓五拾錢
預約定 價金四圓五拾錢

千キ+G34

發行所

全

印行所

所

東京市京橋區彌左衛門町十五番地

現行法規綴編輯所

愛知縣名古屋市長者町丁四拾七番戶

出張所

愛知縣名古屋市本町四丁目四十四番戶

愛知印刷會社

大阪市東區本町五丁目

書肆 岡 島 眞 七

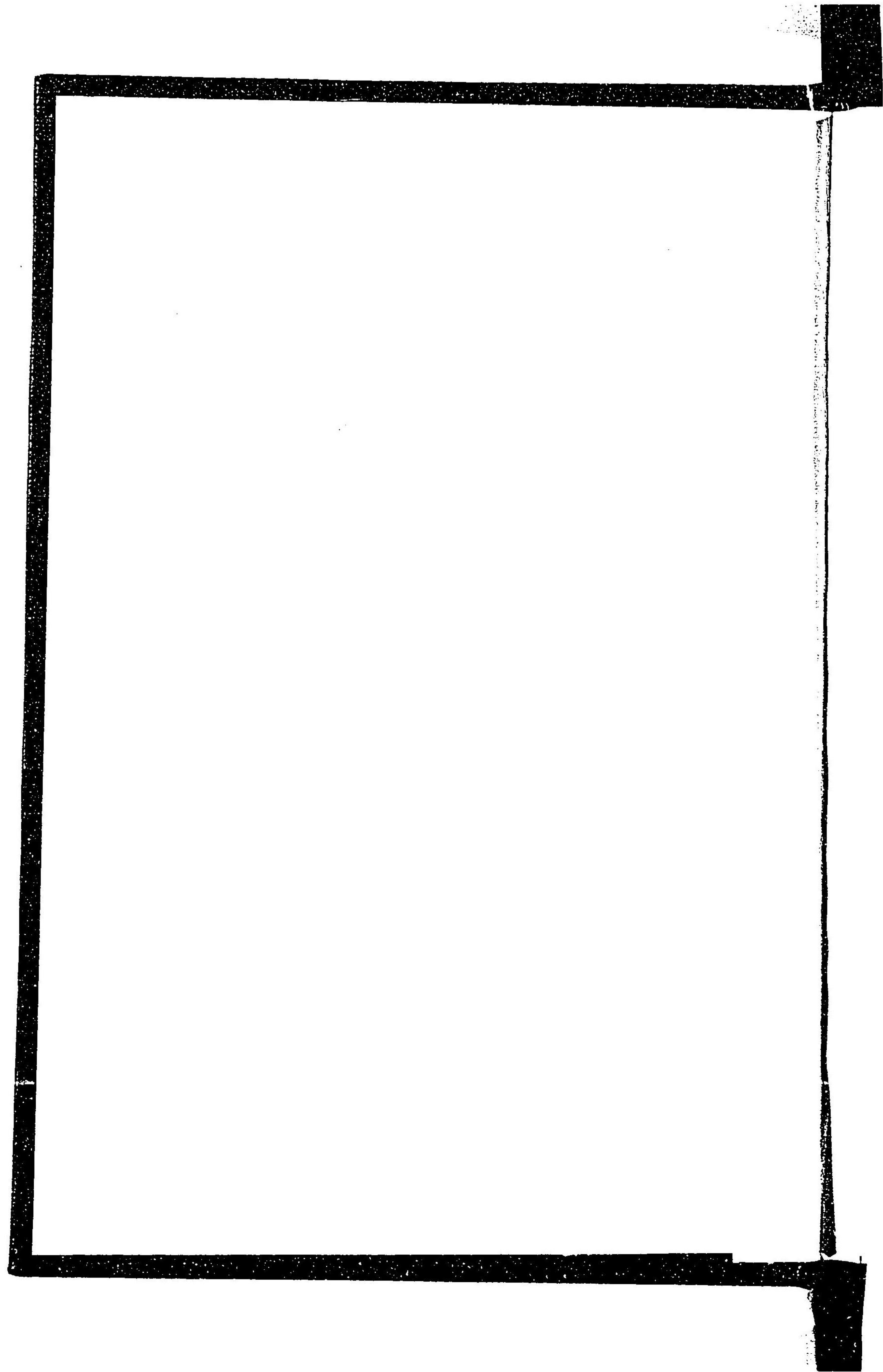
愛知縣名古屋市玉屋町三丁目

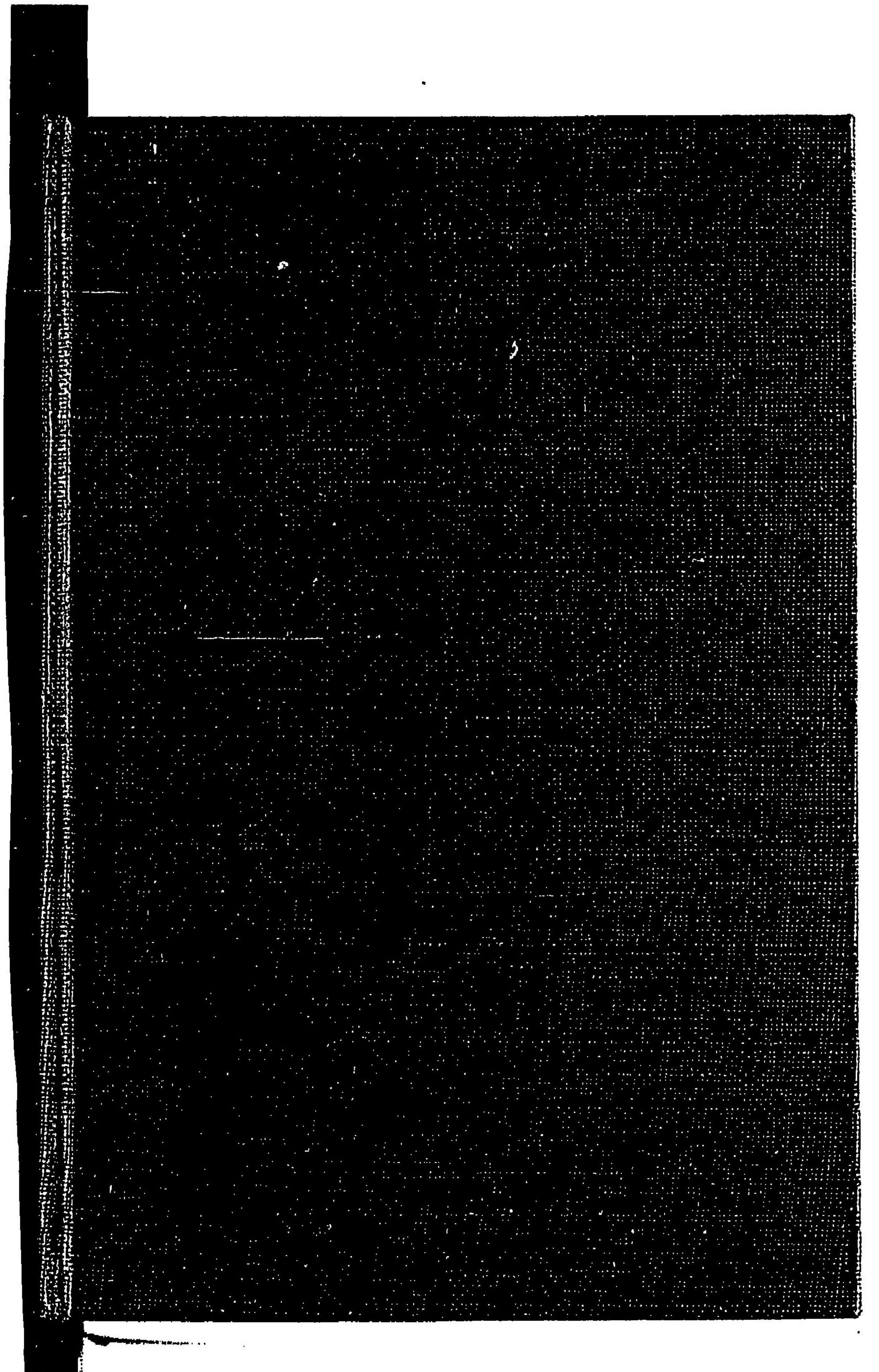
書肆 片野東四郎

東京市日本橋區新大阪町

書肆 小林喜右衛門







030943-004-9

CZ-5-024

現行法規綴

木沢 成廣

林 陸夫 / 編

M24

BBC-0294



